

愛知医科大学 学報



平成27年度医学部卒業記念品
「彫刻『船出』」
(関連記事7頁)



平成27年度看護学部卒業記念品
「書籍棚」
(関連記事7頁)

＝ 第142号 ＝

2016. 4月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス

www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

平成28年度入学式	2
平成27年度卒業式	4
平成28年度予算大綱	8
就任ごあいさつ	12
学長メッセージ	18
教授就任インタビュー	22
退職を迎えて	34
病院機能評価認定	36

平成28年度愛知医科大学入学式

医学部・看護学部入学式



平成28年4月2日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて、平成28年度入学式が挙行されました。

【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、医学部115名、看護学部104名計219名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して医学部の水田圭太郎さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い、本学学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて、佐藤啓二学長から告辞が、来賓の三宅養三理事長、土井清孝医学部父兄後援会会長及び今村明医学部同窓会会長代理同窓会理事から祝辞がありました。

最後に看護学部の杉浦美有さんから「入学式を迎えら

れた皆さまは、今、喜びや希望に満ちあふれておられることと思います。しかしながら、皆さまの目標は、決してこの大学に入学することではありません。無事、国家試験に合格し、良き医療人となることです。これから、医療に携わろうとしている私たちにとっては、人との関わりがとても大切になると思います。多くの出会いを大切にしつつ、個々の人々が抱える思いや気持ちを感じ取り、理解することに努めてください。」と歓迎の辞が述べられ午前10時40分ごろ式は終了しました。



宣誓を述べる水田さん



杉浦さんからの歓迎の辞

告 辞

学 長 佐 藤 啓 二



医学部・看護学部の新入学生の皆さん、入学おめでとうございます。

皆さんは、生命科学を基盤とする医学・看護学を学び、国家資格を取り、医療の世界で貢献することを夢

見て、入学されたことと思います。

今日は、入学に際して、「情報の選択と習得」について、三つの話をしたいと思います。

第一です。2000年まで、人類が30万年かけて蓄積してきた全情報量は、12EB（エクサバイト）と言われていました。エクサバイトは1TB（テラバイト）の100万倍です。しかし、2020年までのたった20年間で、30万年かけて蓄積された情報量の3,000倍である40ZB（ゼタバイト）になると言われています。

医学情報に関して言えば、2012年の医学論文数は104万7千件で、一日2,870論文が新たに発行されています。100編の治療に関するシステムティックレビューを追跡調査したところ、結果が覆るまでのエビデンス生存期間は5.5年であったとの報告があります。毎日膨大な医学情報が提供され、しかもそのエビデンスは5.5年しか持たないということです。

必要な正しい情報を効率よく利用するためにどうしたら良いのでしょうか。

例えば、UpToDateという臨床意思決定支援リソースがあります。全世界で5,700名以上の医師が参加し、常時460以上の英文雑誌を抄読し、21の専門分野について9,500以上のトピックスとして掲載しています。158ヶ国、70万人以上の臨床医とアメリカの90%以上の大学病院で導入されており、日本でも約2割の医師が使用しているとされています。もちろん本学にも導入されています。これは、日本語検索も可能ですが、SummaryとRecommendation（要約と推奨）については、英語を理解することが必要です。

医学英語を習得し、例えばUpToDateやDynaMed等を使いこなすことによって、効率良く情報を選択できることになります。医学英語を学ぶことは、明らかに医師・看護師としての能力アップにつながると思います。

第二です。Digital化された情報を効率よく利用できたとして、医療従事者はそれで良いのでしょうか。京都産業大学の永田和宏教授が京都新聞に書かれた内容を参考にします。

Analogueという言葉があります。時間という連続量

を長針と短針の位置で類似させたり、Digital表示をしたりしますが、厳密には数値化できない情報です。同様に、感情や思想といったアナログ情報は、デジタル情報として一部を伝えることが可能ですが、デジタル情報の隙間から漏れてしまう部分があります。このDigital情報としてカバーできないところにある「感情や思想の一部分」を、受け取る自分の脳で補う作業をして初めて、本当のコミュニケーションが取れることになります。

医療に従事される皆さんには、患者さんの顔を見て、患者さんの気分を理解してから、話を聞くことの重要性を認識してもらいたいと思います。通常digital情報でカバーできない部分を理解することこそ「思いやり」になるのです。

第三です。沈黙の10年、集中の5,000時間の話です。

カーネギーメロン大学の認知心理学教授のジョン・ヘイズ教授は、モーツァルトやピカソ等を対象に研究し、

天才でも名曲や名作を世に送り出すまえに「10年の沈黙期間」が必要であることを見出しています。更に沈黙の10年は必要条件であって、人生のどこかのタイミングで勝負の時があり、その時に「集中の5,000時間」を費やすことができるかどうかで、一流と二流が分かると言われています。

医学生や研修医で考えますと、大学で学ぶ以外に1日2時間集中して勉強をすることができれば、医学部6年、初期研修2年の8年間で、集中の5,000時間を実現することができます。どうやらこれからの8年間で人生の分かれ目になりそうです。

愛知医科大学の学風は「自由」ですが、確固たる「自主」、「自立」の精神に裏付けされることを求めています。

自主・自立の精神を強く持ち、10年の沈黙と集中の5,000時間を経て、日本を支える素晴らしい医療人として活躍されることを期待します。

祝 辞

理事長 三宅 養三



理事長の三宅です。本日は桜の満開の下、晴れて入学式を迎えられ、新入生の皆さまとそこご父兄に心からお祝いとお慶びを申し上げます。

愛知医科大学は、建学から44年が経っておりますが、建学から40年を過ぎますと建物の老朽化や耐震性に問題が生じて参り、平成18年からキャンパス再整備に取りかかり、一昨年の平成26年5月に最後の本丸である新病院が無事完成いたしました。新病院は物流・動線等が非常に完備されており、多くの新しい最先端の医療機器が導入され、日本でも屈指の大病院となりました。しかし、完成してからの1年ほどは、職員が新しい施設に慣れるのに少し時間を要したこと等で新病院効果に限界がありましたが、昨年の後半から稼働率が上昇し、最先端の医療が順調に行えるようになりました。これで、今後50年以上の愛知医科大学のスタート台が整ったと言えます。諸君は、このように本学のキャンパスが最も良い状態に整えられた時点を待っていたように入学され、非常に幸運でした。

さて、今一番日本の医療にとって注目しなければならぬことはなんでしょう。少子高齢化による高齢者の増加と、どのような高齢化医療をなすべきかであります。日本人の平均寿命は男性80歳、女性86歳の時代を迎え、65歳以上の高齢者人口が3,384万人と全人口の26.7%に達しました。このような現状で、どのような医療が望まれるのでしょうか。

先日面白いアンケートを拝見しました。75歳以上の健康な高齢者に「もし年齢を若くすることが可能になったら、何歳若くになりたいですか。」という質問に対して、一番若くならなかった方が10歳くらい若返りたいと答え、面白いことに多くの方々はこのままの年齢が良い、

もし若くなれるにしてもほんの少しだけで良いと答えられたそうです。健康に年齢を重ねておられる人々は、現在の自分の高齢に満足され納得のいく人生を送っておられるのでしょうか。これこそ、神の創られた健康長寿の本質的な姿なのです。このような高齢者を一人でも多く増やすことがこれからの医療・医学の根源的な目標ではないでしょうか。やたら寿命を延ばすことは、神の摂理に反するのかもしれませんが。延命という“量”を測る医療から、希望と満足という“質”を測る医療へ向かうのがこれからの医療ではないかと思えます。寿命より人生の質にこそ価値があるということです。

しかし、現実には高齢化に伴い、多くの認知症を見ることになりました。2025年には、認知症は700万人に達すると言われ、65歳以上の5人に1人が認知症の時代が到来してしまいました。日本における認知症に要する医療費は介護費等を含めると年間14.5兆円といわれ、全体の医療費のほぼ1/3にまで達しています。高齢者は更に増え続け、これに伴い認知症も増えることでしょう。一方で、生産者人口は減り続けております。日本の医療経済はこのままでは破綻することは自明の理です。

それでは、どのような長期的対策が必要でしょうか。専門家によりますと、認知症の治療は現時点では難しくその原因も多様です。最終的には、治療よりも予防の重要性が強調されます。認知症が発病してしまってからでは既に遅く、発病より随分前に体質的にそれを察知して打つ手があればそれを行う医療です。それは遺伝子検索による方法が用いられ、がん検診にも用いられ先制医療と呼ばれます。先制とは、先制攻撃の先制です。超予防医療のことです。愛知医科大学では、昨年からは日本でも初めてのこの先制医療を取り入れ、先制・統合包括医療センターを立ち上げました。それには一つの理由があります。最近の調査によると、愛知医科大学がある長久手市

は、日本の800以上の都市の中で一番住むのに快適な街であることが分かりました。更に、最も市民の平均年齢が若く、若者の街であることが判明しました。また、出生率も一番高く、このような特異な町は、日本の将来の一つのモデルとなりうるということで、先日、石破茂地方創生担当大臣が視察に来られました。このような長久手市を背景に持つ本学には、若い人たちの将来を考えた若い時代から打つ手があれば打つという先制医療はぜひ必要と思われます。

ところで、医師一人作るのに1億円かかるという事実を皆さんはご存知ですか。6年間で一億円ですよ。一日に換算すると、4万6千円です。寝ていても、遊んでいてもそれだけのお金が飛んでいくのです。これには、ご両親の血と汗の結晶によるサポートもありますが、多くの国費を使っているのも事実です。去る3月31日には、厚生労働省が2040年には医師が34,000人過剰になるというデータを示しました。2040年とは24年後ですから、ち

ょうど皆さんは一番脂が乗っている頃かと思います。また、政府がこれからどのような対策を取るかですが、おそらくできの悪い医師を減らすことをまず考えると思います。そうです。簡単に卒業させたり国家試験をパスさせず、医学部に入学した後、医師にする数を制限してくると思われま。ですから、毎年10名くらいは最終的にも医師になれない医学生が出てくる時代も想像されます。しっかり勉学に励まなければなりませんね。

本学には、これまでは医心館という学生の勉強部屋がありましたが、スペースが足りなくなりましたので、この度、この一号館の7階に非常に立派な学生用勉強室を作りました。一度ご覧ください。感激しますよ。このような現状を鑑み、今年からクラブ活動は4学年次生で終わらせる方針を考えております。

厳しい時代が到来します。皆さんもこの現状と一日に4万6千円を使って、医学を学んでいるという意識をもって有意義な学生生活を送ってください。

大学院入学式

平成28年4月2日(土)午前9時20分から大学本館701会議室において、平成28年度愛知医科大学大学院入学式が挙行されました。

式は、看護学研究科修士課程13名、医学研究科博士課程37名の計50名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して医学研究科の川原都さんから「学則並びに諸規

則を守り、先生方のご指導に従い本学大学院学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて、佐藤学長から告辞が、三宅理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。

平成27年度愛知医科大学卒業証書・学位記授与式

医学部・看護学部卒業証書・学位記授与式



平成28年3月5日(土)午前10時から大学本館たちばなホールにおいて、平成27年度卒業証書・学位記授与式が挙行されました。【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、佐藤啓二学長から医学部99名、看護学部108名の卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告辞があり、来賓の三宅養三理事長、土井清孝医学部父兄後援会会長及び小出龍郎医学部同窓会会長から祝辞がありました。この後、在学学生を代表して医学部5学年次生の堀田奈見さんから送辞が、卒業生を代表して看護学部の越智千景さんから答辞が述べられ、卒業記念品の贈呈が行われ、午前11時20分頃に式は終了しました。

告 辞

学 長 佐 藤 啓 二



医学部99名、看護学部108名の皆さん卒業おめでとうございます。

社会人として「働く」ことになる皆さんに、「職人のすごさ」、「医療の現場で働く喜び」について話したいと思います。

ものづくり日本の中でも愛知県は、トヨタ自動車でも有名ですが、H2Aロケット打ち上げや国産飛行機MRJの開発で期待されている三菱重工業があります。そして、下町ロケットのような特殊技術をもった職人さんや会社が多数存在するのも特徴です

エンジン部品が正確に作られているかどうかをチェックするゲージを作る会社では、職人さんは、0.001mmまで削り分けています。人間の感覚は凄いものです。

長い間、職人の話を聞いてきた塩野米松さんの文章には、「徒弟制度の中で学んできた親方や先輩たちは『見て学べ』というだけだった。自分の指先や感覚、体が覚えた技（わざ）を伝えるには、言葉はあまりに幅が狭すぎるからだ。左官屋の親方が『平らに仕上げろ』と指示したときには、見た目の平らさを求めている。大きな平面は凹んで見える。だから、左官は壁の真ん中をそっと盛り上げる。その加減は感覚で身につけるのだ。辛い努力を続けることにより、遠い到達点に近づく喜びが生まれるものだ。今人は働く喜びを感じる事が少なくなっている。見つけ出す過程を経験しなくなっているからだ。」とあります。

医療現場では過ちを犯さないことが重要なので、最低限守るべき内容をマニュアル化し、理解することを求めています。しかし、マニュアルを遵守することは重要ですが、マニュアルを超えて、自分の力を伸ばしていくことに喜びを感じてください。

更に、医療現場には嬉しいこともあります。

「人を支えること」によって、「支えられていること」が実感できる職場であるということです。「思いやる」ことは「思い」を「相手にさし向ける」ことです。相手を理解し、支えてあげることによって、感謝され、自分の存在が意味あるものと感じる事ができる数少ない職業だと思っています。

価値ある職業を選択された皆さんに、今一度、技術のすごさ、努力が喜びにつながる事、思いやることの意義等を考えてほしいと思います。

愛知医大の卒業生は、「All Aichi Idai」の主要メンバーです。「All Aichi Idai」を誇りに思い、ふさわしい活躍を続けられることを期待しています。

皆さんの輝かしい未来にエールを送り、学長祝辞といたします。

祝 辞

理事長 三宅 養 三



本日は医学部・看護学部の学生生活を無事終了され、ここに卒業式を迎えられた学生諸君、それにご父兄の皆さまに理事長として心からお祝い申し上げます。

色々な思い出の残る学生生活もこれで終わり、さてこれからは人の命を扱うプロとして歩むスタートラインに立つわけです。現在の日本の医療、医学、看護学には多くの問題点が浮上していますが、現状の問題を解決するためには諸君の若い力が絶対に必要です。

振り返ってみますと、私が愛知医科大学の理事長を拝命したのは、今から6年余前の2010年の1月でした。医学部の皆さまの大部分は、この年の4月に入学されました。私は、それまでは他の施設におりましたので、本学との関わりは、今年卒業される医学部学生の皆さまとほぼ同じということになります。この6年間、本当に色々なことがありました。2010年1月は、本学が経営的に大ピンチの状態でしたので、予定されていた新病院建設開始は無期限停止の状態でした。しかし、職員の並々ならぬご努力により翌年の3月には建設会社と新病院建設の契約を交わし、7月から建設が開始され、一昨年の平成26年5月に見事完成いたしました。その後、しばらく本格稼働には時間がかかりましたが、ようやく新病院はその機能を十分に発揮し始め、多くの患者さんが押し寄せる一級の大学病院となりました。

国内の大きな出来事としては、2011年3月の東日本大震災でした。この未曾有の大打撃にもかかわらず、日本は急速な復活を遂げ、2020年のオリンピック招致にこぎつけました。皆さんの愛知医科大学在学中にこの二つの大きな出来事とその復興を目の当たりに見たことは、これからプロの医師、看護師として日本の医療に貢献しようとしている諸君にとって、大きな貴重な経験であったと思います。

さて、先週経験した嬉しいお話をします。6年前に理事長を拝命しました時にまず考えたことは、学生の皆さんと交流することでした。私は長い過去の教員生活を通じて、大学で一番大事なものは学生であるという信念を持っておりました。医学部事務部長に話したところ、4学年次生のある学生を紹介してくださいました。彼は国試対策委員長を務め、この学年のリーダーとして素晴らしい活躍をしていました。この学生は2年間この学年のリーダーシップを取り、2012年の卒業式では特別賞を受賞しその栄誉を讃えられました。卒業後は東京で初期研修、後期研修を行っており、この度結婚することになり、結婚披露宴に出席を依頼する招待状が届きました。素晴らしい結婚披露宴でしたが、その場に4名の愛知医科大学の同級生がお祝いに駆けつけていました。皆、卒業後東京、沖縄、広島といった遠方で実に熱心に研修している人ばかりでした。その面々が口をそろえて申しましたことは、外から母校を眺めていると最近の母校の発展が素晴らしいことがよく分かった。そのため、しっかり研修を済ませ、ぜひ母校に帰りたいということでした。素晴らしいですね。外で活躍する卒業生が外から愛知医科大学を高く評価し、いずれ母校に戻ってくる、本当に

健全な大学のモデルのような気がします。

最後に一つだけ忠告しておきます。入学試験の成績と在学中の成績とは全く相関がないという調査結果があります。良い成績で入学しても在学中の成績が悪い学生や、ギリギリで合格しても卒業時の成績が上位の学生は少なくありません。しかし、1学年次生の時に頑張らなかった学生は、ほとんどが卒業時の成績は悪いことが判明し

送 辞

在学学生 堀田奈見さん



春の息吹が感じられるこの良き日に、医学部・看護学部の全課程を終了され、栄えあるご卒業を迎えられました皆さまに、心よりお慶びを申し上げます。

医学・看護の道を志し、ここ愛知医科大学にご入学された皆さまは、医師・看護師となるべく様々な困難に立ち向かい、多くの試練を乗り越えられました。学ぶことを喜びとし、着実に歩みを進められて、見事にその志を成し遂げられ、今日この日を迎えられましたことは、私たち在校生にとりましても、誠に感慨深く、尊敬の念を抱かずにはおられません。

皆さまが、同じ道を志す友と出会い、豊かな人間性を育み、切磋琢磨し、貴重な時間を過ごされたことは、生涯にわたって大きな財産となることでしょう。また、諸先生方の熱意あふれるご指導は、これから歩まれる医師・看護師としての未来において大事な基盤となり、今後大きく役立つことと存じます。

そして私たち後輩には、勉学や臨床実習において、また部活動を通して、多くのことを教えて頂き、本当に有難うございました。心より感謝申し上げます。

今日ここに、新たなる長い道への第一歩を踏み出される皆さまが、愛知医科大学の卒業生であることを誇りとし、これからもいっそう精進され、心温かい信頼される医療者となり、後に続く私たちの道しるべとなつてくださるよう切にお願い申し上げます。

お別れに臨み、卒業生の皆さまの今後ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げ、送別の言葉とさせていただきます。

大学院学位記授与式

平成28年3月5日（土）午前9時20分から大学本館701会議室において、平成27年度大学院学位記授与式が挙行されました。【写真】

式では、看護学研究科修士課程修了者11名、医学研究科博士課程修了者10名一人ひとり、佐藤学長から学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告辞が、三宅理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。

ております。

これは、卒業後にどのような医療人になるかにも通じます。卒業後の数年が一番大事な時期で、この時期にしっかりと励まない人は、ほとんどその後伸びていないことは私の長年の経験から事実であると思います。

どうか研修時代に一生懸命医学・医療の研鑽を積み、母校に戻ってきてください。

答 辞

卒業生 越智千景さん



冬の厳しい寒さも少しずつ和らぎ、春浅くも日増しに暖かさを感じる季節となりました。

今日は、私たち卒業生のためにこのような素晴らしい卒業式を挙げて頂き、厚く感謝申し上げます。また、お忙しい中、ご臨席賜りました学長先生始め諸先生方、ご来賓の皆さま方に、卒業生一同心より御礼申し上げます。

今日、私たち207名は、愛知医科大学を卒業いたします。この晴れの日を迎えることができましたことに、喜びを感じるとともに、これまで私たちを温かく見守り、支えて下さった先生方や家族を始め、多くの方々に深く感謝いたします。

私たちは今、愛知医科大学を卒業し、社会に新しい一歩を踏み出そうとしています。それと同時に社会人として、また医療の現場に携わる者としての責任を果たしていく立場となります。しかし、愛知医科大学で培った一人の人間として大切にしたいことを忘れず、養われた多くの経験を糧にして、あらゆる困難も乗り越えていこうと思います。そしてこれまで以上に学びを深めるとともに、医療従事者として、また一人の人間として成長し続けられるよう、志を高く持ち、日々精進して参りたいと思います。

最後になりましたが、学長先生、ご来賓の皆さま、在学生の方々に御礼申し上げるとともに、お世話になりました諸先生方、地域の皆さま、多くの患者さん、医学部父兄後援会、看護学部父母会、大学職員の皆さま、そしてこれまで惜しみない支援をしてくれた家族に、卒業生一同、深く感謝し、皆さまのご多幸、ご健康を心よりお祈り申し上げます。

そして、母校愛知医科大学の更なる発展をご祈念申し上げますとともに、本学卒業生として、その名に恥じぬよう、社会への貢献に努めていくことを誓い、卒業生代表の答辞とさせていただきます。



彫刻「船出」寄贈

平成27年度医学部卒業生からの卒業記念品として、大学本館たちばなホールに本郷芳哉氏作彫刻「船出」が寄贈され、平成28年3月30日（水）に除幕式が行われました。【写真】

除幕式には、三宅養三理事長、佐藤啓二学長を始め本学役職者、平成27年度卒業生代表の村松沙織さんが出席しました。

村松さんからは、「この作品は常に変化し、膨らみ続ける社会に船を浮かべ、高く進んでいくというイメージが基になっています。私たちも自分の可能性を追求し、常に高みを目指し進んでいきます。」と贈呈の言葉があり、佐藤学長からは、「この記念品は大学、同級生、後輩を結ぶ絆であり、大学はいつ皆さんが戻ってきてても良



い港です。いつまでも大切にしてくださいを待っています。」とお礼の言葉が述べられました。

いつまでも大切にさせていただきます。

「書籍棚」寄贈

平成27年度看護学部卒業生からの卒業記念品として、7号館（医心館）3階ロビーに「書籍棚」が寄贈され、平成28年3月25日（金）に除幕式が行われました。【写真】

除幕式には、佐藤啓二学長、衣斐達看護学部長、八島妙子教務学生部長などの本学役職者や看護学部の教員を始め、平成27年度卒業生6名が出席しました。

卒業生を代表して久野汐里さんから卒業記念品の贈呈があり、「私たちから引き継ぐ書籍をこの本棚に残すことにより後輩の皆さんが、これを利用し看護学の知識や技術を更に身に付け、目標に向かって頑張ってもらいたいと思います。」とのあいさつがあり、佐藤学長から、「大変素晴らしい記念品をご寄贈頂きありがとうございます。末永く大切にに使わせて頂きます。」とお礼の言葉が述べ



られました。

いつまでも大切にさせていただきます。

平成27年度看護実践研究センター 認定看護師教育課程修了証書授与式挙

平成28年3月29日（火）午前10時から7号館（医心館）多目的ホール1・2において、昨年9月に開講した看護実践研究センター認定看護師教育課程の平成27年度修了証書授与式が挙

式は、開式の辞に続き、臼井千津看護実践研究センター長から、感染管理分野22名、救急看護分野12名の修了生一人ひとりに修了証書が授与されました。

次いで、臼井センター長から、「修了は看護師キャリアの一里塚に過ぎません。勉学はこれからが本番であることを覚悟し、羽ばたいていってください。」と式辞があり、続いて、佐藤啓二学長から、「認定看護師の必要性はますます増えているので、本課程で学んだ知識、経験、培った人間関係を活かし、日本だけでなく世界の危機を防ぐ力になれるよう、今後の活躍を期待しています。」と祝辞がありました。



謝辞を述べる代表学生

この後、修了生を代表して、救急看護分野の加藤貴則さんから、「入学当初より、慣れない座学等で大変でしたが、この7か月間の経験を更に上積みし、専門性の高い看護師となるよう、これからも日々努力して参りたいと思います。」との謝辞があり、午前10時40分ごろ式は終了しました。

平成28年度予算大綱

－財の独立なくして学の独立なし－

平成28年度予算が、平成28年3月22日（火）の理事会、評議員会において承認されましたので、お知らせします。医科大学の責務は、先端医療、地域医療を含む充実した「臨床活動」、世界に発信できる「臨床研究」、それに優れた人材を輩出する「教育」です。これらが可能となるような環境作りには、十分な収益を確保し、更にその収益を有効活用することが条件となります。

本学の発展はまさにこれからで、現在はその基盤を着実に作っている最中だと言えます。こうした位置付けの中、平成28年度は効率的で高収益体質の構造改革を期し、その中核をなす医療収入を確保していかねばなりません。

私立医科大学は、経営の安定を自分で図る必要があります。経営難に陥れば満足な教育、研究、診療ができない状態となります。職員の待遇も改善していかねばなりません。このような環境下にあって、いかに大学人のモチベーションを維持させるかが、これからの最も大きな課題となります。これには、大学人として満足できる教育、研究、診療が可能となる環境整備が最も大切であるとの共通認識がありますが、新病院はまさにこれらの点を満足させる最高の舞台であり、その本格稼働を切り札として、本学の経営を安定させ、大学でしかできない、大学で働いて良かったと思える体制作りを推し進め、職員を挙げてこの舞台を盛り上げていく予算を編成しました。

<主な事業>

○情報セキュリティを強化します。

- ・ 標的型攻撃メール対応訓練の実施

○教育・研究環境を整備します。

- ・ 研究創出支援センターの設立
- ・ バイオバンクの設立
- ・ 総合的細胞機能解析システムの導入
- ・ 戦略的研究基盤形成支援事業の推進
- ・ 総合医学研究機構研究基盤設備再生事業の継続
- ・ 基礎科学実験室、基礎科学・基礎医学実習室備品の整備
- ・ 動物実験部門設備の高圧蒸気滅菌装置の更新

○シミュレーションセンターを充実します。

- ・ FunSim J シミュレーション基盤型教育セミナーの開催
- ・ シミュレーションセンター1における可動間仕切壁の設置

○医学教育の国際標準化に向けた取り組みを行います。

- ・ 医学部卒業生情報管理システムの構築

- ・ 国際認証に備えた臨床実習の充実
- ・ 日本医学教育評価機構への入会

○質の高い医療人を育成します。

- ・ 大学院看護学研究科で高度実践看護師の養成（7年計画の5年目）
- ・ 特定分野における高度で専門的な医療・看護実践力を有した診療看護師（NP）の育成
- ・ 大学院学生（NP）奨学金貸与の継続

○高度急性期病院に相応しい体制を構築します。

- ・ 教員の増員（小児科、消化器外科、呼吸器外科、救命救急科）
- ・ リハビリテーションスタッフの増員
- ・ 助教（専修医）及び助教（医員助教）の処遇是正
- ・ 臨床工学士の増員

○効率的な医療を推進します。

- ・ 先進医療推進事業の継続
- ・ 薬剤実習用電子カルテ端末の購入
- ・ 経営改善支援コンサルタント契約の継続
- ・ X線TVシステムの更新
- ・ 放射線治療計画装置の増設
- ・ 脊椎内視鏡システムの整備
- ・ 質量分析器の導入
- ・ メディカルクリニック電子カルテの追加整備

○電子カルテ端末のセキュリティを強化します。

- ・ 学内LAN接続用パソコンの購入

○新ユニフォームを採用します。

- ・ 調理師の被服を一新
- ・ 女性事務職員の被服を一新

○施設設備の整備を継続して実施します。

- ・ バスロータリーの新設
- ・ バスロケーションシステム整備
- ・ アメニティ棟の新設
- ・ 立石池外周道路の拡幅
- ・ キャンパスマスタープランを作成
- ・ 特高変電所変圧器等更新工事を継続
- ・ キャンパス用地整理の継続
- ・ 駐車場用地の整備

○最適な資金計画を策定します。

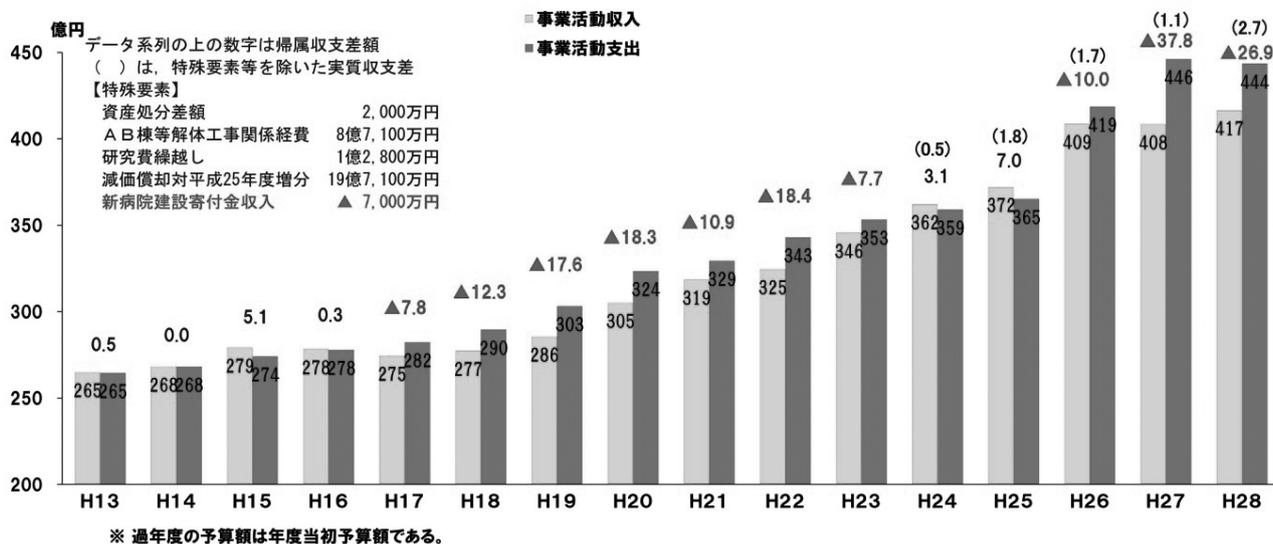
- ・ 募金活動「キャンパス整備等事業に係る寄付募集事業」をスタート

平成28年度の予算状況は、

事業活動収入 416億6,014万余円

事業活動支出 443億5,300万余円

となっており、事業活動収支差額は26億9,286万余円の支出超過となり赤字となっていますが、特殊要素等を除いた実質の収支額は2億2,700万円の黒字予算となっています。



事業活動収支予算では、事業活動収入41,660百万円（前年度比2.09%増）、事業活動支出44,353百万円（前年度比1.82%減）となり、事業活動収支差は、2,693百万円の支出超過となっていますが、AB棟等解体工事関係経費871百万円、研究費の繰越分128百万円、減価償却額の対平成25年度増額分1,971百万円の単年度特殊要素等を調整後の収支額では、227百万円の黒字予算となっています。

資金収支予算（調整勘定を除く。）では、学生生徒等納付金収入5,283百万円、寄付金収入461百万円、補助金収入1,694百万円、医療収入33,072百万円など資金収入合計47,941百万円（前年度比13.80%増）となっています。一方、人件費支出17,956百万円、教育研究費支出20,327百万円、管理経費支出547百万円、施設関係支出1,968百万円、設備関係支出969百万円、借入金返済支出5,525百万円など資金支出合計48,362百万円（前年度比11.62%増）となっています。

＜ 資金収支予算 ＞

平成28年4月1日から
平成29年3月31日まで

(単位：千円)

収 入 の 部			
科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減
学生生徒等納付金収入	5,282,973	5,205,155	77,638
手数料収入	235,554	206,595	28,959
寄付金収入	460,647	734,600	△273,953
補助金収入	1,693,602	1,819,792	△126,190
資産売却収入	0	0	0
付随事業・収益事業収入	404,929	329,082	75,847
医療収入	33,071,889	31,884,910	1,186,979
受取利息・配当金収入	13,274	19,266	△5,992
雑収入	467,458	588,751	△121,293
借入金等収入	3,150,000	150,000	3,000,000
前受金収入	1,045,910	1,106,473	△60,563
その他の収入	8,917,931	6,664,801	2,253,130
資金収入調整勘定	△6,802,929	△6,581,779	△221,150
前年度繰越支払資金	3,766,661	4,070,718	
収入の部合計	51,707,719	46,198,364	5,509,335

支 出 の 部			
科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減
人件費支出	18,143,248	17,956,309	186,939
教育研究経費支出	20,327,403	19,688,913	638,490
管理経費支出	547,398	695,046	△147,648
借入金等利息支出	314,893	280,254	34,639
借入金等返済支出	5,524,846	1,277,346	4,247,500
施設関係支出	1,967,543	1,463,615	503,928
設備関係支出	969,325	1,071,069	△101,744
資産運用支出	150,000	150,000	0
その他の支出	3,874,204	4,143,344	△269,140
[予備費]	250,000	200,000	50,000
資金支出調整勘定	△3,707,357	△3,600,783	△106,574
翌年度繰越支払資金	3,346,216	2,873,251	472,965
支出の部合計	51,707,719	46,198,364	5,509,355

＜事業活動収支予算＞

平成28年4月1日から
平成29年3月31日まで

(単位：千円)

		科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	5,252,793	5,205,155
手数料	235,554			206,595	28,959	
寄付金	394,500			554,600	△160,100	
経常費等補助金	1,601,249			1,624,088	△22,839	
付随事業収入	404,929			329,082	75,847	
医療収入	33,071,889			31,884,910	1,186,979	
雑収入	467,458			588,751	△121,293	
教育活動収入計	41,458,372			40,393,181	1,065,191	
事業活動支出の部	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		人件費	18,296,075	18,062,344	233,731	
		教育研究経費	24,712,403	23,974,522	737,881	
		管理経費	738,398	885,161	△146,763	
		徴収不能額等	21,240	14,600	6,640	
		教育活動支出計	43,768,116	42,936,627	831,489	
		教育活動収支差額	△2,309,744	△2,543,446	233,702	
教育活動外収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		受取利息・配当金	13,274	19,266	△5,992	
		その他の教育活動外収入	0	0	0	
			教育活動外収入計	13,274	19,266	△5,992
	事業活動支出の部	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減
			借入金等利息	314,893	280,254	34,639
			その他の教育活動外支出	0	0	0
			教育活動外支出計	314,893	280,254	34,639
		教育活動外収支差額	△301,619	△260,988	△40,631	
		経常収支差額	△2,611,363	△2,804,434	193,071	
特別収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		資産売却差額	0	0	0	
		その他の特別収入	188,500	395,704	△207,204	
			特別収入計	188,500	395,704	△207,204
	事業活動支出の部	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減
			資産処分差額	20,000	1,708,584	△1,688,584
			その他の特別支出	0	0	0
			特別支出計	20,000	1,708,584	△1,688,584
		特別収支差額	168,500	△1,312,880	1,481,380	
〔予備費〕			250,000	200,000	50,000	
基本金組入前当年度収支差額			△2,692,863	△4,317,314	1,624,451	
基本金組入額合計			△5,400,000	△1,700,000	△3,700,000	
当年度収支差額			△8,092,863	△6,017,314	△2,075,549	
前年度繰越収支差額			△43,631,113	△37,265,830	△6,365,283	
翌年度繰越収支差額			△51,723,976	△43,283,144	△8,440,832	
(参考)						
事業活動収入計			41,660,146	40,808,151	851,995	
事業活動支出計			44,353,009	45,125,465	△772,456	



—再任のごあいさつ—

理事長 三宅 養三

平成28年1月28日の学校法人愛知医科大学理事会において、理事長に再任されましたので、そのごあいさつと今後の大学の展望、グランドデザインについて述べさせていただきます。

平成22年1月に一期目の理事長を拝命し、すでに6年が経過し理事長3期目を迎えました。これまでの最大の懸案は、平成22年1月の時点では建設開始が中断しておりました新病院建設を開始し、無理なく完成させ、それを基盤に今後の愛知医科大学がなすべき方向に向かって一步一步進んでゆく体制を作ることでした。この6年を振り返ってみますと、この懸案はすべて驚くほど順調に完了したと思います。同時に、経営状態も平成22年以後は上向きになり、二期目を迎えた最大の課題であった、現病院から新病院への移行も何とか乗り切り、リーマンショックに代表される資金運用問題も資金運用委員会の慎重で結果的に最適だった対処により、実損を被ることなく終結させることができました。

平成26年5月の新病院完成後は、徐々に稼働率が向上し、特に昨年度からは顕著な実績が目立って参りました。入院・外来患者数、診療単価、手術件数等々は目標数値にほぼ到達し、おかげで平成27年度の予算は、ほぼ達成されました。また、過去16年の病院の増収の推移を見てみますと、平成21年度までの10年間では、総額4億の増収（年平均4,000万円）であったのが、平成22年以後の6年間では、総額74億の増収（年平均12.2億円）となり、これは年平均で約30倍の増収になったこととなります。いかに経営の抜本的な改革がなされたかが数字で示されています。その理由は、収益を上げ支出を削減するという島田孝一法人本部長を中心とした構造改革によるところが大と思いますが、更に重要なことは、病院長を中心に職員が新病院というモチベーションを維持して努力して頂いたおかげと感謝いたしております。

新病院の完成とともに、先端医療に必要な医療機器を約100億円分導入いたしました。芝居に例えますと、舞台と装置は整いました。あとは一番大切な役者（ヒト）をいかに揃えるかで、実はこれが最も重要であると思

います。優秀な医学生を本学に残す、またそのような人材を教育して大成させる、更には現在の大学に多くの有能な指導者を日本中から探してでも揃える、これらはすべて理事長の一つの大きな役割であると思います。実際新病院とともに優秀な技能を持つ医師・職員の大幅な増員を行い、それにより経営が改善したにとどまらず、新病院を基軸としたより質の高い教育や臨床研究を目指しており、本年4月に新設された「研究創出支援センター」をより充実させ、先進の研究と高度の医療を推進しております。

さて、44年の愛知医科大学の歴史の中で再びスタート台に立った本学は、今後どのような道を歩むべきでしょうか。

私立医科大学のすべての基本は、まずは経営の安定であることは申すまでもなく、今後とも最大の努力を惜しみません。種々の先端医療は今後大学として発展させていかなければなりません。一方、超高齢・人口減少社会に対応できるような医療社会環境の整備も求められます。そのために緩和医療、在宅医療、チーム医療、予防医療、生活支援等々にも大学として積極的に介入していく必要があります。更に、第二病院や後方病院を整備する必要もあり、現在着々と準備が進んでおります。

いずれにしても、おかげさまで愛知医科大学の最大の危機は乗り切ることができ、今後は大きな夢を持って本学の発展のために邁進したいと思います。

職員の皆さま方の更なるご協力を期待いたしております。



—これからの看護学部の 発展のために—

看護学部長 白鳥 さつき

この度、看護学部長・看護学研究科長を拝命しました。歴代の学部長が看護学部の発展のために築き上げてきた数々の業績を受け継ぎ、良き伝統を守り、更に発展させる責務を身の引き締まる思いで受け止めております。

愛知医科大学看護学部は、2000年に開設され、今春13回生を送り出し、卒業生は総数1,379名となりました。高い国家試験合格率を維持（2016年度100%）し、愛知県を中心に優秀な看護師を輩出しています。2012年には、保健師課程の選択制を導入し、少数精鋭の育成に努めております。

また、本学は、看護師としてのキャリアを積んだ後の継続教育のシステムも整えています。上級学位が付与される看護学研究科修士課程を2003年に開設し、これまでに修士論文コース72名、高度実践看護学分野の専門看護師（CNS）コース9名、診療看護師コース6名の計87名を送りだしました。修了生は各専門分野で素晴らしい活躍をしています。

2015年には、厚生労働省による特定行為21区分38項目の研修機関として認定されたことも大きな飛躍でした。看護実践研究センターでは、継続教育機関として認定看護師教育部門を2009年に開設し、感染管理認定看護師144名、救急看護認定看護師88名の修了生を送りだしました。また、卒後研修・研究部門や地域連携・支援部門における活躍は看護職者のレベルアップや地域との交流を深めるなど、様々な貢献をしています。

本学看護学部は、このように看護基礎教育、継続教育において着実に発展しており、これらの素晴らしい実績は、歴代の看護学部長のご尽力と、教職員が一丸となって努力した上に成り立つものと思います。私は、看護学部長・看護学研究科長として、この実績を受け継ぎ、更に発展できるよう努力する所存です。

近年の看護教育界は、大きな変革の過度期を迎えています。現代社会が抱える多くの課題と、看護はどのように向き合っていけば良いのか、複雑で難しい問題です。また、1991年にわずか11校であった四年制看護系大学が、2016年には228校、そのうち大学院開校が169校と飛

躍的に増加し、看護教育の高等化が実現した一方で、学生や教員確保の競争が激化し、教育の質の維持に多くの課題を抱えることになりました。

学生側にも課題があります。看護を目指し、高い志を持って入学する学生がほとんどを占めますが、中には明確な目的意識が持てず、悩む学生も存在します。看護師国家資格取得が最低ラインである看護系大学において、看護に関心を持つことから教育を始めなくてはならない状況があるのです。

このような環境下において、社会の期待に応えられる力を備えた専門職者を養成・輩出するためには、何が求められているのでしょうか。まず、教育環境を整え、本学の特徴をより際立たせた教育内容を展開することだと考えます。充実した教師陣を有することや、近接した大学病院で手厚い指導の下にできる実習など恵まれた環境にあることは誇れる資源としてアピールできます。卒業生の半数以上が本院に就職していることも実習環境、卒業後の保証として魅力です。また、現職の教員の教育力、研究遂行能力を高める支援も既に開始されています。

課題は、これらの実績が自己点検・自己評価として集約されてきていないことです。私たち教職員は、常に自らの襟を正し、社会の期待に応えるべく、教育水準を高めることが求められていると考えます。この評価を持って、新たな進むべき道を見極め、社会の変化に有機的に適応できる組織として発展していかなければなりません。

本学における数々の恵まれた資源を生かして、優秀な学生を確保するとともに、優秀な教員を育成し、教育水準を高めること、そのための自己点検・自己評価を集約・分析し、次のステップに進むことが、看護学部長・看護学研究科長に課せられている役割と考えています。



—学無止境—

医学部学生部長 中野 隆

平成28年4月1日より内科学講座（神経内科）の道勇学教授の後任として、医学部学生部長を拝命しました。解剖学講座の中野です。私は本学の四回生であり、長年にわたり本学で研究と教育に携わってきました。

『学無止境』—学問には終止も境界も無い。

これは私の座右の銘ですが、国際化時代の現代、全ての分野においてグローバル化が進んでいます。医学教育においても、例外ではありません。「学生を医療チームの一員として、研修医とほぼ同等の立場で患者を受け持たせて、担当医として診断や診療にまで関わらせる。」クリニカル・クラークシップを基本とする臨床実習を行うため、医学教育モデル・コア・カリキュラムが定められ、共用試験CBTとOSCEが導入されました。更に、世界医学教育連盟（WFME：World Federation for Medical Education）が実施する国際認証は、本邦の医学部にとって“平成の黒船”と喩えられる衝撃的な話題になっています。

国際認証とは、「世界のどの国の医学部を卒業しても、他の全ての国で医療に携わることができるように、各国の医学教育を質的に保証する」ための評価です。本邦の医学部は、2023年までに教育の質を欧米諸国の水準までに高めた上で、国際認証を受けなければなりません。すなわち、クリニカル・クラークシップを中心とした臨床実習をより充実させなければなりません。換言すれば、医学生は今まで以上に、知識だけではなく、応用力や問題解決能力、臨床技能が重視され、更には医療人としての高いモラルや倫理観を要求されることとなります。

学業と学生生活は表裏一体です。とくに応用力や問題解決能力、モラルや倫理観は、講義や実習に集中する必要性は言うまでもなく、課外活動などの学生生活全体を通して培うべきものです。学生生活をサポートする立場にある私たち学生部においては、勉学をサポートする教務部と“機関車の両輪”になって学生指導に邁進します。学生が集中して勉学に取り組み、更に向上心を高めることができる環境を整えるよう取り組む所存です。ご父兄並びに諸先輩におかれましては、一層のご理解とご協力

をお願い致します。

さて、私の学生部長としての“初仕事”は入学式後の新入生ガイダンスでした。在学当時に解剖学講座で研究に取り組み、学会発表や論文作成に励んだ卒業生たちがメッセージを寄せてくれましたので、ご紹介しましょう。

「勉強をするために大学に入ったわけではなく、遊ぶために大学に入ったわけでもない。大学は、医師になり社会に貢献するための通過点でしかない。しかし、同じ時間を過ごすのであれば、より充実した生活を送ってください。」

「6年間、いかにモチベーションを高くして取り組んでいけるかによって、卒業後に“良き医師”になれるか否かが決まってくると思います。私たちの目標は、理想の医師像に向けて努力することです。」

「悪戦苦闘して行った研究やこれまでの経験は、私たちの医師人生に大きな影響を与えており、少なくとも現在の医師像に繋がっていると思います。様々なことを経験することは、今後の人生を豊かなものにすると考えます。皆さんも是非、チャンスを逃がさずに多くのことを経験してみてください。」

彼らが『学無止境』の精神を受け継いでくれたようで、心から嬉しく思います。



中央の象形文字は、世界記憶遺産の東巴（トンパ）文字（中国・雲南省）で、学無止境を意味する



—本学の強みを活かした 看護学教育の実践を目指して—

看護学部教務学生部長 冨喜田 恵子

看護学部は、今年開設16年目を迎えました。開設当初は愛知県下の看護系大学は5大学でしたが、現在では12大学になり、平成29年度以降に2大学増える予定です。学士を取得した看護職者が増えるのは喜ばしいことですが、学生の獲得競争が激化し、教員の確保も深刻な問題になっています。また、少子高齢化による疾病構造の変化、グローバル化や情報化の進展などにより、社会は急激に変化しています。看護学教育においても、「何を教えるか」よりも、「どのような能力を習得しているか」が問われています。本学が存続するには、時代の趨勢を見越した教育の工夫と努力が求められます。

学士を取得した看護職者の特徴は、「自分の考えをはっきりと言える、文章作成能力が高い、論理的に物事が整理できる、看護実践が根拠に基づいている、自己学習能力がある、看護のキャリアを継続する割合が高い」（日本看護系大学協議会より）と言われていますが、これらの能力は、教養科目や専門基礎科目で培われるものと思います。看護学教育のあり方をめぐる論議では、看護学専門科目の充実を目指す話題に集中しがちですが、時代の流れに柔軟に対応できる豊かな人間を育むには、看護学の基盤となる学問領域の充実を図ることも重要な課題であると思います。

幸い本学の教養科目及び専門基礎科目群の教授陣は、医学部を始め、他大学の教育・研究のエキスパートで構成されています。講義では、授業内容に関するだけでなく、医療人としてのあり方や科学的な思考の重要性などを含め、大変刺激的な内容を教授して頂いております。医学部及び学外の非常勤講師とは、年1回懇談会を開催し、授業科目の内容や学生の授業態度などについて、忌憚のないご意見を頂いております。非常勤講師との懇談会では、本学の看護学教育を振り返る機会になっており、大変感謝しております。

看護学部教務学生部は、今年度から更なる良質な看護学教育を目指して、学生教育に関わる委員会体制を改正しました。これまでは、カリキュラム運営に携わる教務委員会と学生生活を支援する学生委員会の2本立てでし

たが、教務委員会の下部委員会であった実習委員会を独立させ、教務委員会、実習委員会、学生委員会の3本立てにし、それぞれ教務学生部次長（各委員会委員長）を配置しました。それぞれの委員会には、専門基礎科学系と看護専門科学系の教員を配置し、カリキュラムの運営、実習教育、学生支援に関する委員会活動の活性化を図るとともに、全ての教員に委員会での情報が行きわたるような体制にしました。各委員会では、委員全員が役割を持ち、委員会目標の達成に向けて計画的な活動を行うことになりました。

本学の看護学教育の強みは、本院看護部との連携教育です。実習教育においては、優れた臨床教授陣の下、経験豊かな臨床実習指導者の指導を受けています。指導者の中には、本学部の卒業生もいます。看護学部生の約65%が卒業後に本院に就職していますが、その背景には実習指導者との温かい交流が就職志願の動機になっているようです。

良質な学生を確保するには、教育の伝統を育むことですが、教育の伝統は自然に育っていくものではなく、日々の教育活動によって導かれていくものだと考えます。今ある教育資源を最大限に活用することが、本学の看護学教育の独自性を発展させることに繋がると考えます。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

主な役職者の改選

○ 法人

【法人本部長】



島田 孝一

引き続き、法人本部長を拝命しました。平成22年の着任以来取り組んできました本学の財政基盤の安定・強化に向け、また、新病院を中心とするキャンパス整備の総仕上げに向け、三宅理事長の下、微力を尽くして参りたいと考えておりますので、どうか宜しくお願い致します。

(再任、任期：H28. 4. 1～H31. 3. 31)

【副学長（診療担当）】



羽生田正行

(外科学講座（呼吸器外科）・教授)

新病院開院後初めて4月から3月まで、すべてを経験した平成27年度でしたが、職員の頑張りで当初予算をほぼ達成できました。平成28年度も佐藤学長の下、診療担当の副学長として、愛知医科大学病院の発展に尽力して参ります。ご支援よろしくお願い申し上げます。

(新任、任期：H28. 4. 1～H30. 3. 31)

○ 大学

【副学長（医学教育担当）】



岡田尚志郎

(薬理学講座・教授)

医学教育の質保証としての分野別国際認証の受審に向けて、全国の大学医学部が一斉に走り出しています。愛知医科大学は、平成30年の受審を目指しています。全教職員及び学生が一致協力して、受審の準備に取り組める体制を整えたいと思います。

(新任、任期：H28. 4. 1～H30. 3. 31)

【副学長（特命担当）】



若槻 明彦

(産婦人科学講座・教授)

副学長を拝命いたしました。男女共同参画事業では、今年度から保育所の拡充、病児保育、24時間保育を実現できるようになりました。教員評価につきましては、提出率向上及び教員の意欲向上のために、新たな方法を取り入れて積極的に行う予定です。

(新任、任期：H28. 4. 1～H30. 3. 31)

【副学長（看護学教育担当）】



白鳥さつき

(基礎看護学Ⅰ・教授)

この度、愛知医科大学副学長、看護学部長を拝命しました。副学長として、学長を補佐し、愛知医科大学の発展に貢献できるよう努めたいと思います。看護学部においては、激増する看護系大学と一方で減少し続ける18歳人口に対応し、優秀な学生確保と教育水準を高め、維持することに務めて参ります。

(新任、任期：H28. 4. 1～H30. 3. 31)

【加齢医科学研究所長】



吉田 真理

(加齢医科学研究所・教授)

引き続き、加齢医科学研究所長を拝命いたしました。昨年度から「神経病理部門」、「プリオン病解剖部門」の二部門に改組され、神経病理学の専門学術機関として、研究や学生教育、地域医療における神経疾患の診断、ブレインリソースセンターとして本邦の神経科学の基礎研究に貢献していきたいと思っております。

(再任、任期：H28. 4. 1～H30. 3. 31)

○ 医学部

【医学部長・医学研究科長】



岡田尚志郎

(薬理学講座・教授)

2018年問題が迫るかで大学医学部を取り巻く環境はますます厳しくなっています。しかし、この状況をピンチと考えるのではなく、皆さまとともに「愛知医科大学の使命」を考え直すためのチャンスと捉え、愛知医科大学の更なる発展に貢献したいと思います。

(再任, 任期: H28. 4. 1 ~ H30. 3. 31)

【メディカルクリニック長】



馬場 研二

(メディカルクリニック・教授(特任))

引き続き、メディカルクリニック長を拝命いたしました。メディカルクリニックは、平成27年度から本院と同じ電子カルテが導入されました。愛知医科大学の医育機関の一つとして、診療・教育・研究の充実に向け、スタッフ一同全力で取り組んで参ります。

(再任, 任期: H28. 4. 1 ~ H30. 3. 31)

【学際的痛みセンター長】



牛田 享宏

(学際的痛みセンター・教授)

引き続き、学際的痛みセンター長を拝命いたしました。学際的痛みセンターでは、色々な領域の専門家と連携し、難治性の慢性痛を中心とした疾患の診療・研究・教育を推し進めることで、この領域の医療の更なる発展に努めたいと考えています。

(再任, 任期: H28. 4. 1 ~ H30. 3. 31)

【総合医学研究機構長】



佐藤 元彦

(生理学講座・教授)

引き続き、総合医学研究機構長を拝命いたしました。動物実験部門、核医学実験部門、高度研究機器部門からなる総合医学研究機構は研究活動の重要基盤です。設備の整備・広報活動を通して利用促進を図り、本学の研究活動の発展に貢献して参りたいと思います。

(再任, 任期: H28. 4. 1 ~ H30. 3. 31)

○ 看護学部

【看護実践研究センター長】



多喜田恵子

(精神看護学・教授)

感染管理及び救急看護の分野で水準の高い看護が実践できる認定看護師の養成、看護職者の卒後教育・研究支援、地域健康支援活動の充実を図りたいと思います。また、愛知医科大学病院看護部との連携・協働を通して、地域社会が求める看護実践の発展に務めて参ります。

(新任, 任期: H28. 4. 1 ~ H30. 3. 31)



愛知医科大学の 更なる発展に向けて

学長 佐藤 啓二

愛知医科大学は、1971年に創立されましたので、今年で45周年を迎えます。

立石池周囲の桜並木は変わりませんが、中央棟開院後2年が経過し、AB病棟・外来棟・救命救急センターを取り壊し、敷地南縁の森の整地等により、大学を取り囲む景観が一変しました。病院機能も大幅にGrade upし、『人にやさしい最先端病院』として広く認知され、延入院患者数・延外来患者数・手術件数等が大幅に増加しながら、在院日数は11日台と更に短縮してきました。

しかし、社会環境・医療環境はどんどん厳しさを増しています。医療費・介護費の総額は2012年43兆円でしたが、団塊の世代が全て後期高齢者となる2025年には74兆円となり、以後も増加し続けると推定されていますので、医療費・介護費を抑制することが喫緊の課題とされています。2018年問題（2018年以降大学入学者数が65万人から減少に転じ、2031年には41万人（63%）まで減少する。）及び医学部定員増（2007年に7,600名であったものが、2019年に9,500名に増加する。）に対しては、優秀な学生を確保するため、入学試験範囲や試験枠の見直し等を行うとともに、優秀な学生を留年させることなく卒業・国家試験合格まで教育する体制整備を進めていかねばなりません。

厳しい環境であればあるほど、改革努力の成果は顕著に現れます。今こそ大学のMission Critical（重要かつ不可欠な任務）を再認識し、飛躍的發展が可能となるよう組織を見直す必要性が高いと判断しました。

まず、今年度の組織体制の変更についてです。

平成12年看護学部創設とともに、両学部の審議・評価機関として、大学評議会が設置されました。旧国立大学における審議事項を引き継いだ評議会組織は、理事会が運営及び経営の最終責任を負う私立大学にあって組織不適合の面が多々あり、機能不全に陥っていたと判断しました。したがってこれを廃止し、大学組織（医学部・看護学部・病院・事務局）を代表する医学部長・看護学部長・病院長・事務局長及び特命担当副学長を交えて、教育・研究・診療に係る重要事項及び将来構想等を審議する組織として「大学運営審議会」を設置することとしました。大学の重要職務を担当される副学長（医学教育担当・看護学教育担当・診療担当・特命担当）と事務局長・学長により、フラットな立場から緊密な意見交換を行い、大学が遂行しなければならないPDCAサイクルを回す場として活動することにしました。

更に大学基準協会や中央教育審議会からは、各大学において研究競争力の強化が喫緊の課題であるとされ、学長が率先して組織改革を進めるべしとの意見が出されて

います。本学にあっては、Jump up作戦により平成27年度科学研究費助成事業申請件数の大幅増（128件から182件）を実現することができましたが、220件超えを目指して努力を継続させなければなりません。また、新たに設置された講座・診療科に対して実験環境の整備も必要であり、大学院生や若手研究者から寄せられる研究相談・研究指導を行う研究拠点及び知財管理・産学連携を進展させる管理拠点も必要になります。臨床医学研究を効率よく実現させるために、今からバイオバンク設置の必要性を指摘して頂いております。これらの必要性を考慮し、研究創出支援センターを平成28年4月から稼働させることとしました。研究支援部門及び共同実験部門に部門長を置き、研究支援部門では研究URA（現在兼務）を置き、科学研究費助成事業申請補助業務や研究相談・支援を積極的に行う予定としています。また、共同実験部門においては、旧学際的痛みセンターを整備し研究環境を整えていますので、希望者から提出される研究計画書を評価し、できる限り多くの研究機会を提供したいと考えております。臨床医学のドクターにとって時間的負荷を軽減しつつ、成果の得やすい研究環境を整えることが、大学全体の競争力強化につながると考えております。ひいては病院所属医師が1st authorとなった英文論文数を年150編程度に増加させること、大学院修了率を80%にまで上昇させることを目標としています。平成28年度は、研究創出支援センター長（事務取扱）として、船出をさせ、大まかな活動を軌道に乗せた上で、平成29年度に新センター長に引き継ぐ予定としております。

次に今年度の検討課題として、IT活用教育の推進が挙げられます。IT活用教育について、私立医科大学では既に先陣争いの如く進められていますので、取り残されることがあってはなりません。本学においては、従来医学情報センター（図書館）と情報処理センターがありましたが、IT活用教育という面から見ると、効率的な組織運営とはなっていませんでした。そこで今年度は医学情報センター長（事務取扱）となり、「IT対応構想委員会」を発足させ、統合も視野に入れた組織改革のあり方を検討することとしました。医学情報センター（図書館）を利用しやすくしつつ、IT活用教育の充実に向けて、知恵を絞りたいと思います。

「柳に雪折れなし」と言います。変わり得る組織が、競争に勝ち残り、成果に繋げていけるものと考えています。愛知医科大学の更なる発展を信じ、『All Aichi Idai』が輝くよう、改革努力を続けたいと思っております。全学の皆様のご理解とご協力をお願いします。

名誉教授の称号授与

平成28年3月31日付をもって定年退職された佐賀信介教授（病理学講座）、小林章雄教授（衛生学講座）に愛知医科大学名誉教授の称号が授与されました。

予算全学説明会の開催

平成28年3月30日（水）大学本館たちばなホールにおいて、平成28年度予算を中心とする全学説明会が開催され、教職員約140名が参加しました。

まず三宅養三理事長から、平成27年度の財政運営は予算と決算が近い数字になる見込みとなったことについて、皆さまの努力に感謝しますとの謝辞があり、あわせて些少ではあるが精励報奨品を支給できたと語りかけられました。続いて、新病院も軌道に乗りようやくスタートラインに立てたので、これからは教育、研究にも力を入れていきたい。このためには、経営を整えないと教育、研究もついてこないの、愛知医科大学をより良くするためには、目的ではなく手段として経営に重点を置き、その結果、愛知医科大学で仕事をして良かったと思えるように環境を整えるべく、平成28年度の予算編成を行ったとのあいさつがありました。

次いで、羽生田正行病院長から、一部新聞で取り上げられたドクターヘリの病院間転送の件について、詳しい経緯とともにドクターヘリ運航調整委員会・運航調整実施部会において本院の主張がほぼそのまま盛り込まれた内容の新たな運航マニュアルが決定されたとの説明がありました。

続いて、予算責任者である島田孝一法人本部長からは、平成28年度予算について、その規模、実質の収支額及び重点事業の内容等について説明がありました。

あわせて、キャンパス整備状況について、最新の状況を撮影した写真やキャンパス平面図を用いて、大学南側新規取得用地やAB病棟等解体跡地の造成状況についての報告があり、今後はアメニティ棟新設やバスターミナル整備の計画も予定されているとの説明がありました。

平成27年度新病院建設募金感謝の集い開催

平成28年2月20日（土）大学本館第1会議室において、新病院建設募金感謝の集いが開催されました。

これは、同募金に100口以上の寄附をされた個人の方々に感謝の意を表すための会で、平成27年12月末までに寄附をされた方々を対象に行われました。

始めに、三宅養三理事長から同募金の趣旨にご賛同頂き、ご支援頂いたことに対する感謝の言葉が述べられ、日本における寄附文化の醸成の必要性、大学の近況等について説明がありました。また、島田孝一法人本部長からキャンパス整備の進捗状況について報告がありました。

続いて、三宅理事長から寄附者一人ひとりの紹介があり、感謝状が贈呈されました。その後、参加者全員による意見交換が行われ、中央棟の寄附者銘板、平松礼二ギャラリーを始め寄贈絵画等の見学を行いました。

見学後に催された懇親会では、出席された方々同士及び本学役員との懇談が行われ、大学、新病院への期待の意見が多数寄せられました。



寄附者との記念撮影



大学の近況報告が行われる

平成28年度職員新任式挙行

平成28年4月1日（金）大学本館303講義室において、平成28年度職員新任式が挙行されました。

式では、三宅養三理事長から、「新病院は開院時の慌しさも次第に落ち着き、日本屈指の機能性が発揮され、働きやすくとても良い状態になってきています。愛知医科大学のある長久手市は快適度で全国1位を獲得し、平均年齢が若く、出生率の高い理想的な都市と言われており、本学は医療福祉の面から貢献をしています。恵まれた職場環境の中で、どうか末永く頑張ってくださいと願っています。」とあいさつがありました。

なお、今年度の新規職員は192名で、内訳は教員76名、事務8名、医療24名、看護84名です。



宣誓を述べる新規職員

平成28年度新規採用職員研修実施

平成28年度新規採用職員114名を対象に、平成28年4月4日（月）、5日（火）の2日間にわたり、新規採用職員研修が実施されました。【写真】

初日は、学生から社会人への意識転換に触れ、「学生と社会人の違い」や、「なぜ、マナーが求められるのか？」について、自ら考え自発的な社会人意識、マナー意識を醸成する研修を行いました。

2日目は、本学の概要、ビジョン等を説明する講義を行い、島田孝一法人本部長から、本学の財政状況の解説と、先人たちの言葉を紹介して、努力の大切さを伝えました。また、羽生田正行病院長から、本院の理念、基本方針や病院のコンセプトについて説明を行いました。

受講者からは、「キャンパス整備に何年も苦勞してきた経緯を知ることができ、恵まれた環境で働けることを実感できました。」、「病院長のメッセージを頂き、気が引き締められました。病院に貢献できる人材になりたいです。」と感想がありました。

講義概要

- 4月4日（月）職場の常識、ビジネスマナー
- 4月5日（火）大学の概要とビジョン、新規採用職員に期待すること



続いて、平成28年度新規採用事務職員6名を対象に、平成28年4月6日（水）～8日（金）の3日間にわたり、事務職員研修を実施しました。【写真】

事務組織の管理職等21名から、各部門の役割について説明を受け、事務組織の役割を理解し、事務職員に必須となる文書事務、問題解決思考等の学習を行いました。また、病院見学时には、普段あまり見ることのできない特別室や屋上ヘリポートなどの見学も行いました。

グループワークでは、キャリアアンカー（仕事に対する様々な価値観）をテーマにした合意形成のワークや課題解決のワークを通して、同期のチームビルディングを行い、1年間の行動目標を立てました。

配属後の成長と活躍により、組織への貢献が期待されます。

講義概要

- 事務組織各部門の役割、機能及び目標
- 文書事務、問題解決思考、電話対応、パソコンの取扱、目標管理制度等
- グループワーク（合意形成、課題解決、行動目標）



事務職員フォロー研修

平成28年3月18日（金）平成27年度に採用された事務職員に対して、配属後1年を区切りとしたフォロー研修が実施されました。【写真】

配属から1年を経て、できていること、できていないこと、これから挑戦していきたいことを整理し、上司・先輩から期待されている役割について質問し、まとめた内容も共有し、2年目に向けた各自の課題を確認しました。また、2年目から目標管理制度の対象となることから、目標管理表・評価表についての説明も併せて行われました。

受講者からは、「電話対応やあいさつなど、基本的なことでも改めて意識していかないといけないと思った。」「これからは後輩ができるため、常にお手本となるような行動をし、周りの状況をしっかり見ることがで



きる先輩になりたい。」との感想がありました。

本学の将来を担う貴重な人財として、更なる成長と今後の活躍が期待されます。

愛知労働局による保育所見学

平成28年2月9日（火）愛知労働局による保育所見学が実施されました。【写真】

当日は、愛知労働局の藤澤労働局長と雇用均等室の白髭室長が事業所内保育所（アイキッズハウス）を見学し、その後、理事長室において、三宅養三理事長及び島田孝一法人本部長と意見交換が行われました。

これは、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」の成立等に伴い、女性活躍に積極的に取り組んでいる事業所として本学が選抜され、保育所見学及び事業主との意見交換会が企画されたものです。保育所内では、運営状況を保育士に確認されるとともに、実際に保育所に子供を預けている看護職員に対して、利用に当たっての意見を尋ねられました。

意見交換では、三宅理事長から看護師や女性教員ら多くの女性職員を抱えている学園としては、必要な施設や制度の充実が、最優先課題であり、事業所内保育所もその一つであったこと、保育所の設置費及び運営費に対す



る労働局主管の助成金を活用しているとの話があり、これに対して、藤澤労働局長からは、助成金制度は国の予算措置との関係であるが、継続・充実させていくことと、女性が活躍できる職場としての事業所運営を引き続きお願いしたいとの発言があり、終始和やかな雰囲気での意見交換がなされました。

愛知県防災ヘリコプター「わかしゃち」離着陸訓練実施

平成28年2月16日（火）午後3時から中央棟屋上ヘリポートにおいて、愛知県防災ヘリコプター「わかしゃち」の離着陸訓練が実施されました。【写真】

今回の訓練は、本学との連携訓練ではなく、愛知県の防災ヘリ単独の離着陸訓練であり、長久手消防署から5名の隊員が応援に駆けつけました。

訓練内容としては、屋上ヘリポートを離着陸場として、時計回りに旋回を加えながら複数回の離着陸が行われ、隊員のきびきびした動きの中にも地上の訓練とは違った緊張感が感じられました。

屋上ヘリポートの使用は、開院以来初めてということもあり、訓練前には防災ヘリ接近時による爆風や爆音による建物施設及び患者さん等に与える影響を懸念しましたが、最上階の14階においても、ほとんど影響がなかつ



たことから、今後のヘリポートの使用について、ハード面のみならずソフト面に対する検証を行うことができました。

教授就任インタビュー

平成28年度に新たに教授に就任された先生方をご紹介します。



解剖学講座・教授

ないとう むねかず
内藤 宗和

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

解剖学とは、たったひとつの細胞（受精卵）から人体発生の最終地点である成体構造を学び、「生命の神秘と驚異」に触れる学問です。私は、解剖学の知識を教えるだけでなく、学生が医師としての基本理念を育むことができるよう、信念と情熱を持って教育に取り組んで参る所存です。また近年、画像診断や手術機器の目覚ましい発展や医学教育の国際化を受け、解剖学に求められるものが変化しつつあります。今後は、時代の変化に合わせた実践的な解剖学教育及び実習を取り入れていくつもりです。

日本全国に多くの優れた市中病院がある中、大学病院の利点とは、“臨床医学分野から、常に基礎医学にフィードバックできる環境にある”と考えます。臨床医学分野と一層の連携をとり、互いに発展できるように研究を続けていきたいと思えます。また、他大学との共同研究及び産学共同研究を進め、本学の社会的評価の更なる向上に努めて参ります。

基礎研究は地道な努力の積み重ねですが、生命の原点に触れ、また人類の未来を大きく変える可能性がある、魅力的な仕事と私は考えています。今後も、形態観察を軸とし、幅広い分野において社会に還元できる研究を続けていくとともに、将来を担う若手基礎研究者の育成にも力を入れていきたいと思えます。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

母校である香川大学の4年次に、サッカー部の練習中に膝を怪我したことをきっかけに、生理学講座の徳田雅明教授の研究室へ通い始めました。6年次に短期留学生としてカルガリー大学・生理学講座で学ぶ機会を頂いた際に、未知の分野を開拓する研究の面白さに触れ、基礎医学の道へ進むことを決めました。前職の東京医科大学では、伊藤正裕教授のもとで「生殖と免疫の連関」をテーマに研究に励んで参りました。免疫病理学の視点から実験を進めるうち、生体の解析を行うための基盤は「解剖学＝形態学」にあることを知り、その奥深さに魅了されたのだと思います。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

形態が有るところには機能が宿り、マクロからミクロまでの構造（器官系－臓器－組織－細胞－細胞内小器官－分子）がそれぞれに機能して初めて、生体のシステムが成り立ちます。このような生命の基盤を扱う解剖学を学び、人体のかたちを観察する力を養うことは、将来、患者さんに接する際に必ず役に立ちます。慎重に観察すればするほど、より有益な情報が得られ、更にそこにパターンを見出せると、次に何が起こるかを推察できるようになります。観察して、その本質や奥底にあるものを見抜き、推察する力は、洞察力と呼ばれます。学生時代には、学問にだけでなく、自分を取り巻く様々な社会環境をも洞察する感性を持ち、それを楽しんで過ごしてください。

オフショット



研究室にて



外科学講座（乳腺・内分泌外科）・教授

なかの しょうご
中野 正吾

— 教授就任に当たっての
抱負を聞かせてください。—

乳がんは年々増加しており、日本人女性の12人に1人が生涯のうちに罹患します。乳がんから命を守るためには早期に発見し、適切に治療を行うことが重要です。当科独自の取り組みとして、診断においてはMRIと超音波を同期することができる超音波fusion画像やマンモグラフィに断層撮影機能を取り入れたトモシンテシスやトモバイオブシー等の新技術を導入し、乳がん発見率の向上を目指しています。

治療においては乳房温存手術、センチネルリンパ節生検などの縮小手術に加え、形成外科と連携し人工物や自家組織を使った乳房再建術も積極的に行っています。チーム医療を積極的に導入し、エビデンスに基づいた薬物療法の実践や緩和医療を通じて、全人的ながん医療を行っています。近年、画像検査の進歩に伴い、甲状腺がんの発見率も増加しています。甲状腺がん手術においては、反回神経や上喉頭神経外枝の偶発的損傷を避け、手術を安全に行うことができる術中神経モニタリングを導入しています。

本講座は、平成14年に東海地区初となる乳腺・内分泌外科を専攻する講座として開講しました。教室の伝統を引き継ぎ、外科学の発展に専心努力する所存です。また、世界に発信できるような研究を継続しながら、社会的ニーズに対して、質・量ともに応え得る診療体制を作りあげ、それにかなう医療人を多く育成することが中野外科の願いです。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

学生時代、呼吸器内科医である父の影響もあり、がん診療に携わりたいと考えていました。どの科に進むか「ボスを見て」と心に決めていました。卒業試験直前に、シラバスにはなかった新任の外科の教授（元熊本大学副学長・小川道雄先生）の特別講義がありました。

「がん患者を受け持つと病室に立ち寄るのもつらい時がある。だが決して逃げていけない。」「がんとはいえども、女性にとって乳房を切り取られることがいかに屈辱的か、理解しなさい。」「患者さんを恋人と思い、コミュニケーションをとりなさい。」など医者的心得について、これほど熱く語る教授がいたでしょうか。

— 「このボスについて行こう。」

90分の講義に感銘を受け、外科の道を歩むこととなりました。この講義に出席していなければ、今の自分はなかったと思います。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

医学に関する専門的な勉強はもちろんのことですが、社会人としての基本的な素養、物事の本質を見抜く力、人との付き合い方も大いに学んでください。また、読書にも多くの時間を費やして頂きたい。医学生向けにたくさんのがんが推薦されています。医学の歴史、医師の伝記、現代医療の問題、生と死など種類は豊富です。騙されたと思って「医学生、推薦図書」と検索サイトに入力してみてください。ほら、たくさん出てきたでしょう？きっと心に残る一冊に出会えます。将来を見据えて、自分の引き出しをたくさん持てるように本から教養を受けてください。

また、これからの時代、英語力がますます大切になります。ぜひ多読、英会話、TOEFL/USMLEに挑戦してください。有名な演説や歌を暗記するのもお勧めです。

オフショット



ノーベル賞受賞者とともに（ウィーン大学構内において）

名古屋市教育委員会共催 市民大学公開講演会開催

平成28年2月13日（土）午後1時30分からイーブルなごやホールにおいて、名古屋市教育委員会との共催で「市民大学公開講演会」が開催されました。【写真】

当日は、名古屋市を始めとする多くの一般市民の方々にご参加頂き、「愛知医科大学における最先端研究・医療」をテーマに、2部構成で行われました。

講演会は、三宅養三理事長による開催のあいさつに始まり、第1部講演では、外科学講座（心臓外科）の松山克彦教授から「心臓外科の現状と最先端医療」と題して、大きく切らない低侵襲心臓手術やカテーテル治療と手術を組み合わせたハイブリッド治療について、具体的な症例や数値を示しながらお話し頂きました。

続いて、第2部講演では、眼科学講座の瓶井資弘教授から「生活習慣病の眼合併症－治療最前線」と題して、生活習慣病から引き起る眼底出血や糖尿病網膜症、網膜静脈閉塞症について、対処法や予防法などを解説頂き、参加者の皆さんは熱心に聞き入っていました。

最後に、佐藤啓二学長から閉講のあいさつとして、中央棟やメディカルクリニックの施設紹介があり、盛況のうちに講演会は終了しました。



松山教授



瓶井教授

男女共同参画プロジェクト委員会 キャリア教育講演会開催

男女共同参画プロジェクト委員会の事業として、平成28年2月18日（木）午後4時30分から大学本館205講義室において、医学生の時期から男女共同参画やワークライフバランスについて理解しておくことを目的とした、「キャリア教育講演会－これからの女性医師のキャリアアップ－」が開催されました。

当日は、「志を持って、プロフェッショナルに生きる」と題して、小出詠子先生（本学同窓会女子医会準備委員会委員長、こいで内科医院・副院長）の講演、「私の女性医師としての過去・現在・未来、そしてつたえておきたいこと」と題して、伊吹恵里先生（総合診療科・教授（特任））の講演が行われました。

開院されている先生、大学病院で働く先生のそれぞれの立場から、職場や家庭における色々な経験談を包み隠さずお話して頂き、聴講した学生にとって、今後の将来像を具体的にイメージすることができ、また、活発な質疑応答も行われ大変有意義な講演会となりました。

最後に、男女共同参画プロジェクト委員会の若槻明彦



小出先生



伊吹先生

委員長（副学長、産婦人科学講座・教授）から、本学の女性医師支援の現状を踏まえた紹介がありました。

男女共同参画プロジェクト委員会では、今後も職場の環境改善を必要とする教職員のために様々な企画を立案・実施していきます。

研究創出支援センター設置

本学の研究においては、研究を活性化し、より多くの研究成果を生み出していく力の創出と、その力を十分に発揮できる研究環境の整備が課題となっていました。そこで、新たな研究支援体制を整備し、本学内外の研究活動の連携を推進するとともに、研究活動の開始から研究開発への昇華及び成果の社会還元までの支援体制を強化することを目的として、平成28年4月1日付けで研究創出支援センターを設置しました。

同センターには、研究支援部門、共同実験部門の2部門が設置されており、研究支援部門は、主に外部資金の獲得、研究支援、産学連携を担い、共同実験部門は、主に共同実験室の管理・運営を担います。両部門が一体となって、研究活動に関する総合相談、若手研究者の育成支援を始めとした総合的研究支援を積極的に実施していく予定です。

エボラウイルス感染症・新興感染症に関する講演会開催

平成28年2月15日(月)名古屋市立大学病院において、本学災害医療研究センター、名古屋市立大学大学院医学研究科麻酔科学・集中治療医学分野及び一般社団法人集中治療医療安全協議会の共催で「エボラウイルス感染症・新興感染症に関する講演会」が開催されました。

講演会では、平成26年9月に米国テキサス州ダラスで発生した3人のエボラウイルス感染症患者を診療したGary Weinstein医師とNanci Nagel看護師及び災害医療に造詣が深いDonna Casey医師(いずれもTexas Health Presbyterian Hospital at Dallas)を講師としてお招きし、詳細な臨床経過と行政、関連機関との連携について講演

頂きました。

新興・再興ウイルス感染症のアウトブレイクに対する人員配置、診療エリアの確保、必要な医療資器材、スタッフのケアなどの解説に加えて、日常における準備の重要性とその効果について詳しく言及され、愛知県全域から60名を超える医師・看護師・消防職員・行政関係者の参加があり、熱心な質疑応答がなされました。

アウトブレイクは世界中のいつでも、どこでも起こりうるため、過去の事例を検証し対策を講じることが不可欠であり、今後も災害医療研究センターはこのような勉強会を継続して開催していく予定です。

シミュレーション基盤型教育セミナー開催

平成28年2月20日(土)・21日(日)の2日間にわたり、シミュレーションセンターにおいて、第21回FunSimJ(Fundamental Simulation Instructional Methods for Japanese)が開催されました。【写真】

このコースは、沖縄クリニカルシミュレーションセンターとハワイ大学SimTikiシミュレーションセンターが共同開発運営しているシミュレーション基盤型教育セミナーです。

セミナーでは、ハワイ大学のBenjamin Berg先生と東京医科大学の阿部幸恵先生がディレクターを、岡山大学の万代康弘先生と琉球大学の内元先生がファシリテーターを担当されました。

東海地区初めての開催となった本セミナーには、医学・看護学教育に携わる様々な分野の受講者が東海地区のみならず、九州・近畿地区から計31名が受講しました。本院からは、医師2名、看護師1名が参加し、シミュレ



ーション教育の基礎や、学習者中心の指導法を学ぶ貴重な機会となりました。

シミュレーションセンターでは、今後もシミュレーション教育を学ぶ場として定期的に講習会を開催していく予定です。

新入学生ガイダンス実施

平成28年度入学生を対象としたガイダンスが、医学部は4月4日（月）・7日（木）・8日（金）、看護学部は4月2日（土）・4日（月）・5日（火）・7日（木）に実施されました。【写真】

各新入生からは、入学の喜びの表情が溢れていましたが、ガイダンスが進むにつれて、これから始まる大学生活への真剣なまなざしが見受けられました。

◆ 医学部ガイダンス概要

日	時間	内 容
四月四日 (月)	9:00	医学部のカリキュラムについて ・ 1学年次のカリキュラムについて ・ 6年間のカリキュラムについて ・ 進級上の留意事項について
	10:30	授業、試験等の教務関係について
	13:00	学生生活支援について
	13:30	国際交流に関する説明
	14:00	合宿研修説明 実習衣採寸・注文
四月七日 (木)	10:00	防犯講習会 ・ 防犯講話 ・ 薬物講話
	11:30	ハラスメントについて 学生相談室の紹介
	13:00	基礎科学ガイダンス
	15:30	学生証配布、ロッカー案内 教科書販売
四月八日 (金)	10:00	学生生活について
	11:00	学生事務手続きについて
	11:30	奨学制度について
	13:00	大学施設紹介 ・ 情報処理センター ・ 医学情報センター（図書館） ・ 愛知医大サービス株式会社 ・ 運動療育センター
		健康診断について

◆ 看護学部ガイダンス概要

日	時間	内 容
四月二日 (土)	11:00	看護学部長・教務学生部長あいさつ
	11:10	教員紹介
	11:40	集合写真撮影
四月四日 (月)	9:00	学修オリエンテーションⅠ (学則、履修規程、学習方法等)
	10:40	学修オリエンテーションⅡ（1部）
	13:00	学修オリエンテーションⅡ（2部）
	15:30	新入生ガイダンス
	15:00	施設紹介 ・ 愛知医科大学愛恵会等
四月五日 (火)	15:30	施設紹介 ・ 運動療育センター
	15:50	事務手続き及び連絡等
四月五日 (火)	10:00	医科大学生として 習得しておくべき心肺蘇生術
	13:00	学業生活について（1部）
	13:30	保健衛生・感染症対策
	14:40	学業生活について（2部）
	15:40	傷害・賠償保険等の説明
四月七日 (木)	16:10	教科書の購入
	16:50	実習衣の採寸
	10:00	防犯講習会 ・ 防犯講話 ・ 薬物講話
四月七日 (木)	11:30	ハラスメントについて
	13:00	施設利用講習会



大学生としてのマナーを身に付けよう 新入生研修実施

本学では、医学部・看護学部ともに新入生を対象に、大学生としての基本的なマナーを学び、医療人としての心構えを身に付けることを目的として、毎年4月に新入生を対象とした研修会をカリキュラムに導入しています。

医学部 医療人入門合宿研修

医学部では、平成28年4月5日（火）・6日（水）の一泊二日で三河リゾートリンクス（愛知県西尾市）において、医学生としての品位や品格、自ら学ぶ姿勢を身に付け、集団行動を通して、実践をためらう心理的抵抗（自分の殻）を打ち破り、これからの学生生活を円滑に過ごす基礎を築くことを目的とした「医療人入門合宿研修」を実施しました。

研修は、三宅養三理事長による「本学の歴史・氏名・教育理研」の講演に始まり、佐藤啓二学長から「医学生生活の心構え」、岡田尚志郎医学部長からの「医学生生活の落とし穴」へと続く、身が引き締まる講演の後、本学の各診療科の内容や特色について臨床教授11名が講演する「愛知医科大学臨床系トーク」が行われました。立食形式の夕食では、三宅理事長を始め、基礎科学、基礎医学、臨床医学の教員と学生との距離を縮める良いきっかけとなったと思われます。

2日目には、学生のチーム力を高めるオリエンテーリングが行われ、合宿所付近を散策し、心理学の宮本淳准教授が出題する難問に挑戦していきました。成績優秀3チームには、理事長、医学部長、医学教育センター長との豪華昼食券が贈呈されました。

合宿の締めは、細川好孝教務部長の「留年しないぞ!」、 「全員国試合格するぞ!」などの掛け声に全員で唱和し、2日間の合宿を無事に終えました。



全員で掛け声を合わせる新入生

看護学部 新入生研修

看護学部では、平成28年4月6日（水）本学体育館において、大学生として学習に臨む姿勢や態度、マナーなどを学ぶとともに、同級生、上級生、教員との交流を図ることを目的とした新入生研修が実施されました。

新入生たちは、白鳥さつき看護学部長から趣旨説明のあいさつを受け、多喜田恵子教務学生部長を始めとする教員たちから「大学生としてのマナーについて」、「保健衛生・感染症」などの講話を熱心に聞いた後、アドバイザーごとに分かれて、昼食をとりながらの懇談会に臨みました。

アドバイザーの教員とは初対面であり、緊張した様子が伺われましたが、時間が経つにつれ、笑い声が聞かれ和やかなひとときでした。

午後からは、キャンパスツアーと題して、上級生とともに大学構内を見学し、学内の各施設について知ることができました。その後、体育館に戻りキャンパスツアーで気になった施設等についてグループで発表しました。

最後に、上級生からの話に加えて学生間の交流会が開かれ、貴重な情報を得る機会となりました。新入生にとっては、これからの学生生活を送る上で、大変有意義な一日になりました。



グループ発表

交通安全講習会開催

平成28年4月18日（月）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、愛知警察署交通課総務係警部補の清水重春氏を講師にお迎えし、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会が開催されました。

講師からは、愛知県は昨年も交通死亡事故ワースト1でしたが、現在は2位であり、汚名返上のためスロー、ストップ、スマートの3S運動や夜間のハイビーム運動、自動車の全座席のシートベルトの着用等を強力に推し進めていること、交通事故は愛知署管内では13.5人に1人

が関わっている計算になり、決して他人事ではないこと等の講話があり、引き続きDVDを鑑賞しました。「命はひとつ!」と題されたDVDは、寝たきりとなってしまった被害者の青年の映像や亡くなってしまった方々の遺品を展示した「命のミュージアム」の紹介とともに事故映像から危険の予測・回避を学ぶことができる内容でした。

受講した学生331名にとって、この交通安全講習会を通じ、交通安全に対する意識を常に高く保ち、一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

平成27年度実験動物慰霊祭挙行

平成28年3月9日（水）午後1時30分から実験動物供養塔前において、平成27年度医学部実験動物慰霊祭が厳かに執り行われ、医学の教育・研究の発展のための礎となった諸動物の冥福を祈りました。

慰霊祭では、始めに本学の医学研究のために貢献した動物の諸霊に対し参加者全員で黙祷が捧げられました。引き続き、岡田尚志郎医学部長から、瞑目した諸動物に対して、その尊い献身に感謝するとともに慰霊の辞として、医学研究の発展のため尊い犠牲となった動物たちの霊に哀悼の意を表し、今後とも動物愛護の精神に基づき、更に実験動物の愛護に努めることを誓いました。

その後、佐藤元彦総合医学研究機構長、奥村正直動物実験部門長に続いて、日頃動物実験や飼育に携わって



哀悼の辞を述べる岡田医学部長

る教職員や学生一人ひとりから白いカーネーションの花が献花台に捧げられ、諸動物の冥福を祈りました。

平成28年度白衣式挙行

平成28年4月1日（金）午後3時30分から大学本館たちばなホールにおいて、平成28年度白衣式が挙行されました。

白衣式では、共用試験CBT・OSCEに合格し後期課程に進級した医学部生に対して、「Student Doctor」の称号を授与します。学生は新しい臨床実習用の実習衣を着て、白衣式に出席しました。

始めに、岡田尚志郎医学部長から、臨床実習に臨む者としての心構えについて話があり、代表者にStudent Doctor証書が授与され、細川好孝医学部教務部長から全員にStudent Doctorのワッペンが授与されました。

学生代表の柳澤彩乃さんから「医療現場でしか得られない様々なことを学ぶため、日々勉強し、常に自分で考え、目的を持って行動したいと思います。本日から、Student Doctorの自覚と責任を持ち、患者さんを始め医療チームの方々からも、『一人の医療者』として認められるよう、より一層、努力していくことを誓います。」と代表の言葉がありました。



学生宣誓

また、佐藤啓二学長、羽生田正行病院長、小池三奈美看護部長からも激励のあいさつがあり、終わりに、学生代表の阿藤文徳さんが宣誓文を読み上げ、全員が復唱するという形で学生宣誓が行われました。

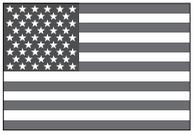
白衣式終了後、大学本館エントランスホールにおいて記念写真を撮影した後、レストランオレンジにて臨床教員及び看護部職員との懇親会が開催されました。

篤志献体者に 文部科学大臣から感謝状贈呈

本学の解剖学等の教育・研究のために献体頂いた次の方々に対し、文部科学大臣から感謝状が贈呈されました。なお、感謝状の贈呈は、献体者のご遺族が受領を希望された方です。

伊藤 吉郎 殿	猪上 豊 殿	岩月 舜子 殿	大西 錦子 殿	片岡シゲ子 殿
加藤 允子 殿	木下 靖己 殿	木村加根子 殿	久保田鈴子 殿	近藤 弦吉 殿
佐伯 孝子 殿	酒井 郁子 殿	杉浦 時江 殿	諏訪 知子 殿	田内すゑ子 殿
竹内 節江 殿	田中榮美子 殿	田中 正夫 殿	角田 正弘 殿	遠山 のぶ 殿
梶尾 節子 殿	中山 敬三 殿	野村 薫 殿	服部美知子 殿	原 節子 殿
平田 正五 殿	舟橋 一江 殿	古田 淑子 殿	牧野 弘子 殿	松林 静子 殿
三上美佐子 殿	森崎 去げ子 殿	森永ミヅヨ 殿	山口三木男 殿	渡邊すま子 殿

(以上 五十音順)



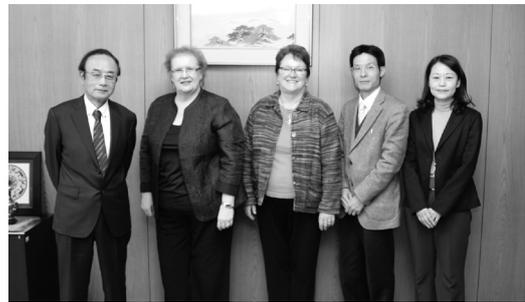
国際交流

ケース・ウェスタン・リザーブ大学教員来学

看護学部では、平成28年2月16日（火）から2月22日（月）までの日程で、学術国際交流提携校のケース・ウェスタン・リザーブ大学（米国オハイオ州）から、Elizabeth Madigan氏（看護学部在宅看護学領域教授）とDiana Morris氏（看護学部老年看護学領域准教授）を招へいし、相互の交流を図りました。

今回の招へいでは、看護師のためのキャリアアップセミナー（テーマ「CNS / NPの米国における教育と活動」）、教員対象の講演会（テーマ「アメリカの高齢者包括ケアプログラム（PACE）の現状と課題」）及び教員との小グループディスカッション（テーマ「日米の地域包括ケアシステム」）を開催するとともに、本院や長久手市内の福祉施設等（訪問看護ステーション、デイサービスセンター、グループホーム、住宅型有料老人ホーム、地域包括支援センター）の視察を行いました。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学は、教員の相互研修派遣や学生の短期留学など、本学部との学術交流に対して非常に協力的であり、今後の発展に向けて大変有意義な招へいとなりました。



理事長表敬訪問



学長表敬訪問



訪問看護ステーション視察

平成27年度第3回看護学部・看護学研究科FDセミナー開催

平成28年2月22日（月）看護学部における教育・研究指導上の問題点を明確にして、その解決法を考察するとともに、看護系教員のレベルアップを図るためのFDセミナーが開催しました。

今回は、大阪大学全学教育推進機構・准教授の佐藤浩章先生を講師としてお招きし、「大学で教える人のためのルーブリック評価入門」についてお話して頂きました。

始めに、大学設置基準第25条の2（成績評価基準等の明示等）における「大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。」ことについて話され、客観的で厳格な評価の重要性とルーブリック評価の関連性について説明されました。

ルーブリックとは、「複数の評価項目について、学習

成果を数段階に分けて記述し、学習者の行動を評価するための基準」のことであり、テストだけでは評価できない、複合的な能力評価に有効で、結果のみならずプロセスを評価するときにおいても価値があり、実学を志向する学術評価にも向いていると述べられました。作成したルーブリックは、少なくとも3回の改訂を行うことを目指し、最初から完璧なものを求めずに、ブラッシュアップを継続するとよいとアドバイスもありました。そして、一つの課題を複数の教員が同じルーブリックを使って評価し、評価基準を調整するためのモデレーション作業も重要であると述べられました。

セミナーの後半では、今後、授業や実習などで活用できるように実際にルーブリック評価を作成しました。

看護学部FD委員会は、これからも教育研究の質向上に積極的に取り組んで参ります。

看護学部一日体験入学開催

平成28年3月25日（金）に「看護学部一日体験入学」が開催されました。高校生を対象として、看護系大学における講義の実際を体験することで、大学で看護学を学ぶことへの関心を深めて頂くことを目的としています。

当日は、57名の高校生が参加し、午前中の体験授業（テーマ：からだの中の“音”からいのちを探ろう）では、実際に聴診器を使いながら、呼吸音や心音、腸蠕動音を聴き、自身の健康について考えました。

昼食は、レストランオレンジで学食体験をし、アシスタントを務める看護学部生と歓談しながら交流を深めました。

午後は、ドクターヘリ、ドクターカー、シミュレーションセンターや国際交流センターをそれぞれの解説を聞きながら見学しました。

参加した高校生からは、「愛知医科大学の魅力が十分伝わった。」、「進路を考える良い参考になった。」、「在学生と話すことができるとても良かった。」などの感想が寄せられ、参加した高校生にとっては貴重な体験をすることができ、とても有意義で充実した内容となりました。



からだの音を聴く参加学生



ドクターカー見学

平成28年度看護学部臨床教授等辞令交付式

平成28年4月13日（水）午前10時から看護部管理室において、平成28年度看護学部臨床教授等辞令交付式が行われました。【写真】

看護学部の臨床教授制度は、平成20年4月に実習教育の充実を図るために本院看護部と提携された教育制度です。

本制度導入以降、看護実践の場での豊かな経験を踏まえた看護職員に臨床教授等の職位を委嘱し、大学教員とともにこれからの看護を担う学生の指導に当たって頂きます。現在は、本院以外の実習施設も導入していますが、臨床教授の大半が本院看護部の看護職員の方々に委嘱されています。

平成28年度の同制度では、臨床教授3名、臨床准教授2名、臨床講師4名に委嘱されることとなり、白鳥さつき看護学部長から辞令が交付されました。



看護学部では、これからも本院看護部と連携・協働を通して、豊かな人間性と確かな看護実践能力を持った看護職者の育成に取り組んで参ります。

運動療育センター講演会開催

平成28年2月20日（土）大学本館たちばなホールにおいて、運動療育センター講演会が開催されました。【写真】

講演会に先立ち、健康亭馬花鳥さん（元尾張旭市健康福祉部次長）による健康落語が披露されました。素人とは思えない本格的な高座に、会場は大きな笑い声で満ちあふれていました。

続いて、講演会では、脳科学の研究で有名な東京大学薬学部教授の池谷裕二氏を講師としてお招きし、「脳を知って脳を活かす」をテーマに、「やる気」や「記憶」などを中心に、脳が持つ性質や特徴、癖について最新の科学的知見に基づいて、分かりやすく楽しくお話して頂きました。

客席では、講演内容を熱心にメモされる方々が多く、非常に充実した時間を過ごされました。今回は、340名を



を超える方々にご参加を頂き、盛会のうちに終了しました。

本センターでは、これからも多くの方々に興味を持って頂けるテーマを中心に調査研究を進め、地域の方々の健康づくりに少しでもお役に立てるように努めていきます。

医学部学外体験実習体験記

愛知県内の心身障害者施設にご協力頂き、平成28年2月8日（月）から2月19日（金）にかけて医学部2学年次生が学外体験実習を行いました。心身障害者の人たちと接する初めての体験は、医学生に大きなインパクトを与えたようです。実習を終えた学生の感想文を紹介します。

障害を受け入れるには～私たちができること～

実習施設：独立行政法人国立病院機構 東名古屋病院
2学年次生 小出 里沙

今回、私は重症心身障害者の方の施設に伺いました。私はボランティアで愛知医科大学病院の小児科に行き、子供たちと遊ぶ、ということを定期的に行っているため、病気の子供たちと触れ合うことには慣れていていると思っていました。しかし、子供たちと触れ合ってみて、一番いづもと違うと感じたのは、そばにご両親がいないということでした。

小児科ボランティアでは、ご両親は近くにいて、病院に泊まっている方もいらっしゃいます。しかし、今回の実習では、ご家族の姿をあまり見かけませんでした。自宅で療養できないため入院しているというのは分かりますが、家族がそれを支えるのは当然だと思っていました。この施設にいる方は、それがなかなか叶わないこともあるのを知り、障害についての課題が浮き彫りになった気がしました。また、自分の子供に障害があるということを受け入れる難しさを実感しました。

小さい頃は両親に思いっきり甘えたいだろうし、両親の愛情もたくさん受けたいものだと思います。それをできないというのは、私は寂しいような悲しいような気持ちになりました。少しでも家族が障害を受け入れやすくするためには、医療者、特に医師の最初の説明が大切なのだと分かりました。私たちの担当をしてくださった武藤先生がおっしゃっていたように、医師がどういう言い回しで説明するかどうすれば家族は障害を受け入れられるようになるのか、ということは誰も教えてくれないし、学ぶ機会もありません。これから私たちは、医学的なことだけを学んでいくのではなく、人の気持ちを考え、人の感情的な部分も自ら学んでいく必要があることが分かりました。今回の実習、ボランティアなどから感性を研ぎ澄まして学びたいです。

午前も午後も子供たちと関わって感じたことは、話せなかったり耳が聞こえなかったりしても、何かを訴えることができるということです。表情であったり、手を動かしたり、息遣いであったり、感情を表現する手段は本当にたくさんあることが分かりました。その表現を周りにいる人たちが、どこまで汲み取るかによって、患者さんたちのQOLは変化してくるのかもしれないと思いました。

施設で働いていらっしゃる皆さんは、患者さんの大半

が、退院するときは亡くなる時ということを感じていらっしやっており、そういう患者さんのために何をしてあげるのが良いのか、どうしたらより良く生きられるのか、楽しく生活できるのかを考えながら接しているのが伝わってきました。だからこそ、それぞれの立場から患者さんをしっかり見つめ、患者さんに寄り添えるのだと思います。

今までも重症心身障害者の方と関わったことがありましたが、実習という形で関わると、また違う側面を見ることができ、先生からの説明があると医師としてはどのように接しているのかが見えてきました。私が想像していたよりもとても良い、実のある実習になりました。

私たちの内面も大きく変化しました。武藤先生を始め、院内学級の先生方、多くの看護師さんが積極的に私たちの教育を行おうとしてくださっていることが伝わり、一層身が引き締まる思いでした。勉強をしている中で、本当に大変だと思うこともよくありますが、こんなに私たちを教育してくださる方もいらっしやるということが分かり、今後も頑張ろうと思いました。

東名古屋病院で実習することができ、本当に良かったです。ありがとうございました。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学短期留学体験記

看護学部では、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学フランシス・ペイン・ボルトン看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。平成28年3月に、看護学部生2名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記をご紹介します。

Case Western Reserve University 短期留学を終えて

3学年次生 波多野 葉

平成28年3月12日（土）から21日（月・祝）までの10日間にわたり、私たちはアメリカ合衆国オハイオ州にあるケース・ウェスタン・リザーブ大学（CWRU）看護学部での短期留学に参加しました。プログラムの内容は、看護学部の講義や演習への参加、学生とのペアによる病院実習体験、様々な施設見学などでした。私たちはこれらのプログラムを通して、アメリカと日本との文化や医療制度などの違いを知ることができました。

留学を経験して最も驚いたことは、病院実習でした。学生が患者さんへの投薬を行ったり、カルテの書き込みをしたり、看護ケアの時に看護師の見守りがなかったりなど、日本では考えられないことばかりでした。アメリカの学生は堂々としていて、とても良い雰囲気を実習を行っていました。反面、日本の学生は常に緊張しており、その影響で自ら行動するという積極性がなくなってしまうのかもしれないと感じました。更に病院実習が毎週1回あることにも驚きました。CWRUでは、講義と演習、実習のサイクルを短くすることで、実践力をつけ、看護師1年目から一人前の看護師として働ける知識と技術を身につけていました。

講義や演習でも、学生は手を挙げて発言したり、自分の意見を述べる等、とても積極的でした。やはり、このような積極性を日本の学生も見習うべきだと思いました。講義では、語学の授業である日本語のクラスにも参加しました。週末にオハイオ州の大学生による日本語スピーチコンテストが開催されるということで、そのリハーサルにも招待されました。日本語クラスの学生はとても日本語が上手で、アメリカの大学生と日本語でコミュニケーションをとれることに感動しました。

その他に、私たちは4か所の施設を見学しました。最初に訪問したMcGregor PACEという施設では、在宅看護、訪問介護、診療、デイケアを一貫して行っていました。利用するには、年齢や所得の制限があり、高齢者や低所得者のあらゆる介護・看護・医療ニーズに包括的に対応する施設であるとの説明を受けました。Hospice of the Western Reserveでは、患者さんが良い最期を迎えられるよう、アートやスピリチュアルなどの様々なセラピーが行われており、施設のデザインは患者さんの心を癒せるように工夫されていました。Seidman Cancer Centerでは、壁に有名な芸術家による絵やがんを克服

した患者さん（サバイバー）の写真などが飾ってあり、所々にきれいな美術品が置かれていました。がん治療をしている患者さんが前向きに治療できるよう、また、がん治療の辛さやストレスが緩和され、患者さんにとって治療しやすい環境になるようにしているのだと感じました。最後のドクターヘリ・シミュレーターの見学は、CWRUに事前に要望を伝えて実現したものです。世界で唯一のドクターヘリ・シミュレーターであり、それを体験できたことはとても貴重な経験だったと思います。

今回の留学は、10日間という短い期間でした。英語を上手に話せない私たちでしたが、CWRUの先生方、学生、各施設の人々は私たちを温かく迎えてくださり、このような支えがあったからこそ、私たちはこれだけの貴重な体験をすることができました。この経験を生かし、自分の中にある看護という視点を広げ、今後の学習や実習へ活かしていきたいと思っています。



日本語スピーチコンテスト参加学生と指導教員



留学プログラム修了証書授与式

定年退職教授最終講義

今年3月で定年を迎えられた2名の教授の最終講義が大学本館たちばなホールにおいて行われました。

長年にわたり本学の発展に多大なる貢献をして頂き、また、本学の医学教育に対しご尽力くださいました先生方の講義には、学内外から多数の方が聴講に訪れました。

ここに、先生方の最終講義の様子についてご紹介いたします。

小林章雄 教授 平成28年2月22日（月）

【教育から一つに、教育へ一つに

社会医学からみた学びの庭】

小林先生は、昭和57年7月にご着任以来、長年にわたり医学部学生に対する衛生学分野の教育指導に大変な熱意を持って当たってこられました。特に、座学では学び得ない“社会に直接触れる”ことを課題として、医学・医療を社会的視野から学ばせて、人間的基盤や倫理性を身に付けさせることに精力的に取り組まれました。

また、教務委員会の委員を8期にわたり務められ、医学教育の改革・改善を始め多くの懸案事項に対してご尽力なされ、中でも、入学直後の医学部学生に対する医療人教育の重要性を提唱され、“医療人入門”の授業を企画・立案されたことが現在の低学年次の医療人教育の充実につながっております。

最終講義では、先生の大学生生活時に、ホームレス支援等の様々な活動の中で、医学生としての立場で社会に出会ったことや、その後、医師としての仕事を通じて社会と社会医学との間の距離感に葛藤を覚えたこと、続いて、こ



れまでの社会医学に関する幾多の研究活動に取り組んでこられた状況を写真や資料・データを用いて詳しくお話くださいました。これは先生が挙げてこられた業績を伺い知ることができる興味深いものでした。

講義の最後には、これまで先生が関わってこられた多くの方々への感謝の言葉をもって締めくくられました。

佐賀信介 教授 平成28年2月24日（水）

【病理学とともに40年】

佐賀先生は、平成9年4月に病理学第2講座の教授としてご着任以来、医学部学生に対する卒前教育はもとより、病理専門医の育成においても大変な熱意をもって指導に当たられ、医学における病理学の重要性を提唱してこられました。

また、先生はこれまで医学部長、教務部長、医学教育センター長の教学の役職を歴任され、本学における医学教育や充実した教育環境づくりに力を注がれ、医学部カリキュラムの抜本的改革にも手腕を発揮されました。

最終講義では、先生の高校生・大学生時代の様子がうかがえる写真やお話に始まり、研修医時代に1か月間、病院の病理部での研修を経験されたことを機に病理学の道に進まれたこと、続いて、その後、長きにわたり取り組んでこられた「ファイブロネクチンと受容体、接着斑蛋白質」に関する研究を始めとする幾多の研究活動に関し、多くの資料・データや写真を提示して詳しく講義をしてくださいました。



講義の終盤では、40年にわたる教育・研究にかかる多忙な日々の合間にお仲間との有意義な休日を送られた様子を紹介くださり、それは先生のお人柄がうかがえるものでした。

最後に、これまで関わりのあったの方々への感謝の言葉とともに、愛知医科大学の益々の発展を祈念していると話され、講義を終えられました。

—退職を迎えて—

“長年の勤務お疲れ様でした”

長年にわたり本学に勤務され、本年3月31日をもって定年退職又は期間満了退職された方々をご紹介します。
なお、定年退職後も再雇用等により本学にご尽力頂ける方もみえますので、引き続きのご活躍をご期待いたします。
退職に当たり、一言メッセージを頂きました。



佐賀 信介 先生
(病理学講座・教授)

退職のごあいさつ

昨年度末をもちまして、本学を退職いたしました。平成9年4月1日に赴任してから、19年間お世話になりました。この間、様々な出来事がありました。振り返ってみますと、印象に残った出来事がいくつも思い返されます。赴任する10日前に講義実習のシラバス作成を依頼されて驚いたこと、赴任当初、教育・研究の立て直しのた

め、日々教室の整備に明け暮れたこと、平成14年度からは医学部長を拝命して、当時全国で準備が進んでいた共用試験や卒後臨床研修の実施に備えて、教育制度改革や医学部の制度改革に忙殺されたこと、リーマンショックに伴い新病院建設が延期となった時期に再び医学部長を拝命し、執行部の一員として、新病院建設に貢献できたことなど、数々の想いが去来してやみません。

今後は、全国的に病理医が不足していることもあり、地域の病院で病理診断業務のお手伝いをして参ります。長い間にわたり、皆さまからご支援、ご鞭撻を賜りましたことを心より感謝申し上げます。



小林 章雄 先生
(衛生学講座・教授)

定年退職に当たって

昭和57年7月に32歳で名古屋大学から赴任以来33年間という長い年月を愛知医科大学で過ごさせて頂きました。この間、多くの方々に支えられ、励まされて無事に今日を迎えることができました。心より感謝申し上げます。長い間どうもありがとうございました。

大学での生活を振り返ってみますと、必ずしも平坦な道ばかりではなかったかと思いますが、まさに「艱難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(新約聖書・ロマ書)の言葉のとおり、試練と葛藤の中からこそ、その時々、より明るい光が差してきたように思います。

縁あって皆さま方とこの時代をともに大学で過ごすことができた幸せを思い、皆さま方の一層のご活躍、奮闘をお祈りすると同時に、大学が益々発展し、そのことを通じて、社会における新しい価値の創造とより普遍的な理念の実現に寄与していくことを願っております。



平井 信弘 さん
(中央臨床検査部・主任)

永きにわたり、愛知医大の発展とともに歩き続けられたことをこの上ない喜びと感じております。

良き諸先輩や同僚とともに働けたことを深く感謝しております。これまでありがとうございました。



望月 博 さん
(中央放射線部・技師長)

36年間の長きにわたり勤務を続けられたことは多くの皆さま方の助けがあったからであります。心より御礼を申し上げます。愛知医科大学の更なる発展を祈念いたします。



大塚 喜義 さん
(法人本部・主事)

開学と同時に入職して44年。多くの方々に温かいご支援を頂き、いつも新鮮な気持ちで続けることができました。心より感謝申し上げます。愛知医科大学の益々のご発展を祈念いたします。



戸邊 博夫 さん
(総務・秘書室・法務監)

短期間ではありましたが、学校教育法改正に係る諸規程改正、ネーベン規制等数々の改革に携わらせて頂いたことを感謝しています。本学の益々の発展を祈念申し上げます。



羽谷 篤 さん
(栄養部・主事)

初めて歩いた立石池周辺は桜満開でした。あれから5年、池から眺める愛知医大は外来棟が姿を消し、新病院がそびえ建っています。栄養部始めお世話になった皆さま方に感謝しつつお別れいたします。



病院機能評価（3rdG:Ver.1.1）認定

本院は、平成27年9月10日（木）、11日（金）の2日間にわたり、財団法人医療機能評価機構による審査を受けた結果、病院機能評価（3rdG:Ver.1.1）基準を達成していることが認定されました。（認定期間：2015年10月17日～2020年10月16日）

国民の医療に対する関心や要求は量的な整備から、良質な医療の提供へと変化してきています。このような環境変化の中で、病院は第三者機関による評価を受けて質の高い医療サービスを提供していくことが求められています。

本院では、平成26年度から病院機能評価の受審に対する準備を進め、各部門での改善・改革を進めると同時に、マニュアルの作成・見直しを行ってきました。また、組織横断的な委員会も立ち上げ、患者さんの視点に立った病院運営の改善も行ってきました。

病院機能評価は、「書面審査」と「訪問審査」から構成されています。訪問審査においては複数の評価調査者（サーベイヤー）により、所定の評価項目に沿って病院の活動状況が評価されました。



認定証

本院は、この改善・改革を継続して実践し、患者さんに選ばれる病院を目指していきます。

卒後臨床研修修了証授与式挙行

平成28年3月14日（月）午後6時から大学本館701会議室において、卒後臨床研修修了証授与式が挙行されました。

式は、羽生田正行病院長を始め、佐藤啓二学長、岡田尚志郎医学部長、春日井邦夫卒後臨床研修センター長及び各副センター長等が出席の中、整然と且つ厳かに執り行われました。

始めに、春日井センター長から「2年間の臨床研修で医師として立派に成長してくれました。新病院に移行してからの第一期生として、救急外来やプライマリケアセンターの立ち上げに貢献してくれて、皆さんに感謝しています。今後の更なる飛躍に期待しています。」と告辞があり、各出席者からの祝辞の後、センター長から一人ひとりに修了証が手渡されました。

今回修了した30名（研修医28名、研修歯科医2名）のうち18名は本院の専修医として、専門医や学位取得を目指すこととなります。本院での臨床研修医として修得し



修了生との記念撮影

た知識、技術及び経験を生かし、各々がより一層の精進が期待されます。

若葉ナース卒業式挙行

平成28年2月18日（木）レストランオレンジにおいて、若葉ナース卒業式が挙行されました。【写真】

これは、本院に入職した新卒看護師が1年間の成長を振り返るとともに、指導に当たった先輩たちと互いに成長を祝う会として、平成22年度から毎年開催しています。

国家資格を取得し、初めて本院に入職する新卒看護師を「若葉ナース」と呼び、名札に初心者マークを付けていますが、この式をもって初心者マークから卒業します。

式では、小池三奈美看護部長から新しい名札を渡されるとともに、新人教育担当者（新人教育の責任者）へねぎらいの言葉をかけられました。また、若葉ナース自身が、自己の1年間を振り返り、「大変だったけれど、たくさんの人に支えられて成長しました。」と、喜びと感謝をメッセージとして届け、とても感動的な場面となりました。卒業式の後には、食事を取りながら会話が弾み、あっという間に時間が過ぎました。



卒業を迎えた若葉ナースたちは、更に成長するため自己研鑽をするとともに、来年度の若葉ナースを迎えるための準備に取りかかります。

ASGN認定証交付式挙行

平成28年3月25日（金）病院長室において、平成27年度初めて誕生したASGN 6名の認定証交付式が執り行われました。【写真】

ASGNとは、Aichi Medical University Hospital Super General Nurseの略称で、看護部キャリア開発システムにおいてジェネラリスト（特定の看護分野に関わらずどのような対象者に対してもその場に応じた知識・技術・能力を発揮できる者）レベルⅣの実践能力を保証された看護師の呼称です。管理者（師長・主任）やスペシャリスト（専門看護師や認定看護師）と役割を分け、臨床での看護実践に力を発揮するとともに教育者として組織に貢献します。

6名のASGNは、緊張した面持ちで羽生田正行病院長から認定証、看護部長からASGNのラベルが入った名札を受け取りました。認定証はゴールドに輝き、キャリアファイル（ポート・フォリオ）の表紙を飾ります。

今後は、臨床教育者（Clinical Educator）として、部署の指導はもちろん看護学部生の臨地実習指導、看護教育委員として院内研修の企画などにも携わります。



院内初となるASGN 6名

また、他職種の教育にも協力させていただきますので、看護部まで連絡してください。

ASGNの皆さん

8B 山口美保子看護師，9A 左近朋子看護師

10A 鬼頭真樹子看護師，EICU 亀井隆之看護師

救急外来 金岡正枝看護師，友茂樹看護師

新規採用医師ガイダンス開催

平成28年4月1日（金）新規採用医師ガイダンスが開催されました。対象者は4月1日付け新規採用医師、帰局医師及び新規採用臨床研修医で計79名が受講しました。

このガイダンスは、医療安全を始めとする、主な院内ルールの周知徹底を目的に開催しており、羽生田正行病院長による「辞令交付」と「病院の概要及び経営方針」の説明に始まり、各部門の責任者から、院内主要部署の

業務内容、救急医療体制、医療安全管理、感染予防対策、プライマリケアセンターの役割などについてのガイダンスが集中的に行われました。ガイダンスの内容は、日常の診療に直ちに反映されるものばかりであり、参加した医師は真剣な表情で受講していました。

これ以降に年度途中で入職する医師については、今回の講義内容を録画した映像を視聴することにより、ガイダンスに充てることとしています。

臨床研修医ガイダンス開催

平成28年4月1日（金）から9日（土）まで、新人研修医13名及び研修歯科医3名を対象に、本院における臨床研修に必要な基本的な事項についての「臨床研修医ガイダンス」が開催されました。

羽生田正行病院長及び春日井邦夫卒後臨床研修センター長から医師としての心構え等についての話しから始まり、北川好郎副センター長や先輩研修医との自己紹介を兼ねた「一問一答」や、電子カルテの操作方法、除細動器等の実習、BLS（一次救命処置）研修において、常に研修医2年目が1年目を指導したり質問に答える、いわゆる屋根瓦方式の指導を行いました。

最後に春日井センター長から、臨床研修医一人ひとりに臨床研修許可証が手渡され、8日間のガイダンスが終了しました。このガイダンスの内容は、参加した臨床研修医の方々にとって、将来必ず役立つものと期待されます。



救命処置の流れを確認する研修医

詳しくは、卒後臨床研修センターホームページでも紹介しています。

平成28年度病院経営方針・特定共同指導説明会開催

平成28年4月20日（水）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、羽生田正行病院長による病院経営方針説明会が開催されました。

会場には多くの職員が出席し、羽生田病院長から平成27年度実績報告及び平成28年度病院経営方針が示され、「平成26年5月に開院した新病院も、昨年後半から高い稼働状況を維持し、今後も職員の皆さんには充実した診療体制へのご協力を頂きたい。」とのあいさつがありました。

また、平成28年度五つのアクションプランについて、

(1) がん診療連携拠点病院取得対策WG（三嶋秀行リーダー）、(2) 地域医療連携強化WG（若槻明彦リーダー）、(3) 救急患者受け入れ体制WG（武山直志リーダー）、(4) 手術室、GICU運用WG（藤原祥裕リーダー）、(5) 特定共同指導対策WG（深津博サブリーダー）から、本院の課題を踏まえた上で各ワーキンググループの目的や目標について説明がありました。

全職員が一丸となり、病院経営方針とアクションプランを実施していくことにより、本院の更なる発展と成長が期待されます。

保険診療に関する講習会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習会が、年間2回以上開催されていることが必須とされており、平成28年3月29日（火）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、平成27年度第2回講習会が開催されました。

講習会では、株式会社メディセオの市川喜誉氏を講師にお招きし、「平成28年度診療報酬点数改定のポイント～2025年あるべき姿の医療提供体制に向け2018年同時改定への助走～」のテーマでご講演頂き、今回の改定の基本方針等を含めポイントを分かりやすく解説・説明頂きました。

また、平成28年4月20日（水）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、平成28年度第1回講習会が開催されました。

始めに、「平成28年度診療報酬改定のポイントと本院

の今後の方向性」と題し、医事管理部の秋田高典部長から、今年度の診療報酬改定を基に、今後本院が行う施策ポイントについて説明がありました。続いて、「特定共同指導について」と題し、医療情報部長の深津博教授（特任）から、特定共同指導について指導項目や具体的な対応等について説明がありました。

また、平成28年5月10日（火）から外部機関による「保険診療遵守支援」を受けることが決定しており、対応内容やスケジュールについても併せて説明がありました。特定共同指導は、平成11年以降17年間指導を受けていないことから、病院職員にとって特定共同指導を再認識する良い機会となりました。

それぞれの講習会には、医師、コメディカル及び事務職員等幅広い職種の方が参加し、職員の関心の高さを窺える講習会となりました。

集中治療領域における初期診療講習会（FCCSコース）開催

平成28年4月16日（土）・17日（日）の2日間にわたり、シミュレーションセンターにおいて、医療安全管理室が主催でFCCSコース（Fundamental Critical Care Support）が開催されました。【写真】

FCCSは、米国集中治療医学会が開発したコースであり、集中治療を要する患者さんの初期対応について学ぶコースです。対象は医師のみではなく、看護師や臨床工学技士など集中治療に関連する全ての医療従事者となっており、日本国内では平成21年の初開催以降約4,000人が修了しています。

今回の本学における第1回コースでは、医師32名（うち研修医16名）、本院所属の2名を含む看護師11名の合計43名の受講生が修了証を取得しました。

重症患者の救命には、適切な理論に基づいた迅速で標



準的な医療対応が必要とされます。このような医療従事者を多く育成することで、医療安全の実現と患者の予後改善につながることから、次回以降も多くの職員が受講されることが期待されます。

メディカルクリニックからのお知らせ 外来患者さん用駐車場を新設

平成28年4月1日（金）からメディカルクリニックの隣接地を新たに取得し、外来患者さん用駐車場（コインパーキング方式）を整備しました。【写真】

これにより、既設駐車場が満車となり、自家用車で来院する患者さんに不便をかけていた状態が解消され、利便性の向上が見込めます。

また、この駐車場はメディカルクリニックの診療時間外には一般のコインパーキングとして運用されます。



腫瘍免疫寄附講座 上田龍三教授 文部科学大臣表彰受賞

医学部腫瘍免疫寄附講座の上田龍三教授が、文部科学省が科学技術に関する研究開発、理解増進等に顕著な成果を取めた者を表彰する「平成28年度科学技術分野の文部科学大臣表彰〈科学技術賞開発部門〉」を受賞されました。【写真】

受賞業績名「新規抗がん抗体薬モガムリズマブの研究開発」

科学技術賞開発部門は、社会経済、国民生活の発展向上等に寄与し、実際に利活用されている（今後利活用が期待されるものを含む）画期的な研究開発もしくは発明を行った者に贈られるものです。

表彰を受けた上田教授から「今回の受賞は、最も治療の困難な白血病で未だに治療法の確立していない成人T細胞白血病（ATL）に対する有効な抗体薬の開発研究にアカデミアと企業との共同研究で成功したことに対する受賞であります。患者さんやご家族の方々に喜ばれた



のが一番嬉しいことですが、これまでの多くの共同研究者とともに喜びたいと思います。また、本件研究を継続・発展できる環境を与えて頂いている愛知医科大学に心より感謝申し上げます。」と感想がありました。

先制・統合医療包括センター 福沢嘉孝教授 第5回臨床ゲノム医療学会 功労賞受賞

先制・統合医療包括センターの福沢嘉孝教授が、平成27年11月3日（火・祝）東京大学伊藤国際学術研究センターにおいて開催された第5回臨床ゲノム医療学会において、功労賞を受賞しました。

これは、同会で福沢教授が発表した「『未病段階からのセルフメディケーション』先制医療による（超）早期診断と健康寿命延伸の秘策—大学病院における国内外初のマーナ（mRNA）健康外来創設—」が高く評価され、その功績に対して授与されたものです。

表彰を受けた福沢教授から「マーナ（mRNA）健康外来を開設してから、半年間で延べ約160名が受診されました。これらの受診者の中には、がんリスク診断で中～高リスクと診断されると同時に腫瘍が実際に早期発見され、手術予定で現在検討中の症例や中リスクという結果が出たが、担当医師の数カ月にわたる生活習慣への密接な介入・指導・管理によって、リスクが軽減・消失した症例等を多々経験しました。今回、マーナ（mRNA）健康外来の設立から受診者への意識付け・行動変容の現況について、本学会で発表したところ、学会初の功労賞を受賞することができました。この功績に対して、学会



功労賞授与式
福沢教授（左）、渥美和彦理事長（中央）、水島洋大会長（右）

関係者を始め海外の医師の方々から激励のお言葉を多数頂戴し、更にモチベーションが高揚した次第です。また、本年3月から毎週金曜日にメディカルクリニックにおいても、企業向け団体検診が開始されましたので、本センターは第二段階へ進展したものと考えます。国民の皆さんの健康寿命延伸に微力ながら貢献できれば幸いです。今後とも、本学、本院の皆さまの更なるご支援・ご協力を何卒宜しくお願い致します。」と感想がありました。

医学部学生が日本解剖学会全国学術集会において学会発表 山田崇義さんらが「優秀発表賞」受賞

平成28年3月28日（月）から30日（水）ビッグパレットふくしま（福島県郡山市）で開催された第121回日本解剖学会全国学術集会において、本学医学部1～3学年次生（現2～4学年次生）が3題の学会発表を行いました。

学生たちは、休日返上で解剖学講座の研究室に通い詰め、深夜までかかって何度も何度もポスター原稿を書き直し、ようやく発表にこぎつけました。発表当日は、“解剖学の権威”と言うべき他大学の先生方との間で、活発な質疑応答が行われました。一大学から学生が3題もの演題を発表したのは本学だけであり、本学医学部生の研究に対する高い意識が伺えました。その中でも、2学年次（現3学年次）の山田崇義さんらは「優秀発表賞」に輝きました。

発表した学生からは、「私は今、得難い多くの経験をしている。」「この一年で自分に色々な変化があったことを実感している。愛知医大に入って心から良かったと思える。」「研究活動は、楽ではないが楽しい。」と感想が寄せられました。

また、今回は新たな試みとして学生セッション交流会が開かれたため、他大学の学生と親睦を深めることができ、互いに刺激になったようです。学生生活の中で、“大きな財産になる経験”ができたことと思います。この経験を生かし、幅広い視野を持つ医学生に育ってくれることと信じています。

発表演題3題

山田崇義, 伊藤由希子, 今枝 陽, 中里尚貴, 南川大輔, 横井宏幸, 小澤由紀, 内藤宗和, 中野 隆: ‘自己学習啓発型’骨学実習手びきの提案 - WFME国際認証に向けて -

春日仁志, 伊藤由希子, 大石 仁, 宮木孝昌, 内藤宗和, 中野隆: 副肝管が認められた一例胆道の側副路としての機能的・臨床的意義

蓬莱春日, 古屋佑夏, 矢倉富子, 大道裕介, 大道美香, 宮木孝昌, 内藤宗和, 中野 隆: 右側由来の腎動静脈を伴う左側単腎症 - 馬蹄腎との関連についての解剖学的・発生学的考察 -



学会ポスター発表会場にて
前列左から今枝陽さん, 横井宏幸さん, 南川大輔さん
後列左から中野隆教授, 春日仁志さん, 伊藤由希子さん,
山田崇義さん, 中里尚貴さん, 古屋佑夏さん, 蓬莱春日さん



優秀発表表彰式
山田さんと大会長の八木沼洋行教授（福島県立医大）



他大学生と討論する古屋さん（左）と蓬莱さん（右）

学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科

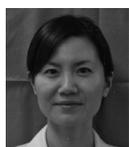


岩崎 慶大

学位授与番号 甲第456号

学位授与年月日 平成28年2月4日

論文題目:「Role of hypoxia-inducible factor-1 α , carbonic anhydrase-IX, glucose transporter-1 and vascular endothelial growth factor associated with lymph node metastasis and recurrence in patients with locally advanced cervical cancer (子宮頸癌のリンパ節転移と再発におけるHIF-1 α , CA-IX, GLUT1およびVEGFの役割)」



浅井 晶子

学位授与番号 甲第457号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「High-resolution 400K oligonucleotide array comparative genomic hybridization analysis of neurofibromatosis type 1-associated cutaneous neurofibromas (高密度400KオリゴアレイCGHを用いたNF1患者の皮膚線維腫のゲノム解析)」



森井 裕子

学位授与番号 甲第458号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Young Coconut Juice Supplementation Results in Greater Bone Mass and Bone Formation Indices in Ovariectomized Rats: A Preliminary Study (ヤングココナツジュース摂取が閉経後骨粗鬆症モデルラットの骨代謝に及ぼす影響)」



岡庭 紀子

学位授与番号 甲第459号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「eNOS plays an important role in the regulation of colonic inflammation: A novel therapeutic target and a predictive marker for the prognosis of ulcerative colitis (腸管炎症の制御におけるeNOSの重要性:潰瘍性大腸炎の治療予後ならびに新規治療標的)」



森 大樹

学位授与番号 甲第460号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Poly I:C enhances production of nitric oxide in response to interferon- γ via upregulation of interferon regulatory factor 7 in vascular endothelial cells (poly I:Cは血管内皮細胞におけるインターフェロン- γ 誘発一酸化窒素産生をinterferon regulatory factor 7の増強を介して亢進する)」



館 昌彦

学位授与番号 甲第461号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Mass spectrometric determination of prostanoids in rat hypothalamic paraventricular nucleus microdialysates (質量分析法によるラット視床下部室傍核透析液中プロスタノイドの定量)」



水谷 元紀

学位授与番号 甲第462号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Comparable outcomes between autologous and allogeneic transplant for adult acute myeloid leukemia in first complete remission (成人第一寛解期急性骨髄性白血病における自家移植と同種移植の予後比較について)」



山原 年

学位授与番号 甲第463号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「*Callicarpa longissima* extract, carnosol-rich, potently inhibits melanogenesis in B16F10 melanoma cells (カルノソール高含有タカクマムラサキエキスはB16F10メラノーマ細胞のメラニン産生を強力に阻害する)」



山本 泰大

学位授与番号 甲第464号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Nephroprotective Effects of Hydration with Magnesium in Patients with Cervical Cancer Receiving Cisplatin (子宮頸がん患者に対するマグネシウムを含んだハイドレーションのシスプラチン腎障害予防効果の検討)」



梶川 圭史

学位授与番号 甲第465号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Optimal method for measuring tumor extent in needle biopsy specimens to identify small-volume prostate cancer. (微小な前立腺癌を識別する為の、前立腺針生検における腫瘍量の至適評価法)」



二井 章太

学位授与番号 甲第466号

学位授与年月日 平成28年3月5日

論文題目:「Hepatic effects of estrogen on plasma distribution of small dense low-density lipoprotein and free radical production in postmenopausal women (閉経後女性へのエストロゲン投与による肝臓刺激がsmall dense LDL血中分布と活性酸素産生に与える影響)」

**野田 久嗣**

学位授与番号 甲第467号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「Risk factors for bleeding evaluated using the Forrest classification

in Japanese patients after endoscopic submucosal dissection for early gastric neoplasm (フォレスト分類による胃腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術後出血のリスク因子の検討)」

**塩入 達政**

学位授与番号 甲第468号
 学位授与年月日 平成28年 3月17日
 論文題目：「Sequence determination of synthesized chondroitin sulfate dodecasaccharides (合成コンドロイチン硫酸十二糖の配列決定)」

**陸 美穂**

学位授与番号 甲第469号
 学位授与年月日 平成28年 3月24日
 論文題目：「Down-regulation of the zinc-finger homeobox protein TSHZ2 releases

GLI1 from the nuclear repressor complex to restore its transcriptional activity during mammary tumorigenesis (乳腺の腫瘍形成において、ジンクフィンガー蛋白TSHZ2の発現低下はGLI1を核内の転写抑制複合体から遊離し、転写機能を活性化させる)」

**中垣 明美**

学位授与番号 甲第470号
 学位授与年月日 平成28年 3月24日
 論文題目：「Differences in autonomic neural activity during exercise between

the second and third trimesters of pregnancy (妊娠中期と妊娠後期における運動中の自律神経活動)」

**泉 雄一郎**

学位授与番号 乙第379号
 学位授与年月日 平成28年 3月24日
 論文題目：「Uterine artery embolization by use of porous gelatin particles for

symptomatic uterine leiomyomas: comparison with hand-cut gelatin sponge particles (症候性子宮筋腫に対する多孔性ゼラチン細粒を用いた子宮動脈塞栓術の検討：用手調製ゼラチンスポンジ細片との比較)」

◆大学院看護学研究科**加藤 友恵**

学位授与番号 第77号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「生活保護担当保健師が捉える生活保護受給者の特徴と健康支援」

**寺澤 好美**

学位授与番号 第78号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「長期在院の統合失調症患者の終末期ケアにおける看護師の体験」

**江上 直美**

学位授与番号 第79号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「高齢者のドライスキンに対する洗浄法と保湿剤による保湿効果の検証」

**國松 秀美**

学位授与番号 第80号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「避難所看護活動における看護師・保健師協働モデルの在り方研究－東日本大震災の活動実態から－」

**近藤 裕子**

学位授与番号 第81号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「家族介護者の介護に対する肯定感・否定感に関連する要因－認知症高齢者を介護する家族の家族機能に焦点を当てて－」

**布目 雅博**

学位授与番号 第82号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「わが国の手術室における医療安全に関する文献研究」

**坂 恒彦**

学位授与番号 第83号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「高齢患者における術後せん妄予防に関する看護師の実践とその有効性の認識－A県内における調査－」

**福田 裕一**

学位授与番号 第84号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「個人の写真を使った日常的な回想が看護師と認知症症状にある高齢者に与える効果」

**牧野 悟士**

学位授与番号 第85号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「チーム医療における医療者間のコミュニケーションに関する文献研究－コミュニケーションの困難に関する認識に焦点を当てて－」

**山本 美紀**

学位授与番号 第86号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「わが国の救急外来におけるトリアージに関する文献研究」

**横山 剛志**

学位授与番号 第87号
 学位授与年月日 平成28年 3月 5日
 論文題目：「過活動膀胱 (overactive bladder : OAB) を有する高齢者における転倒要因の検討」

研究助成等採択者

○公益財団法人大幸財団

第33回（平成28年度）学会等開催助成

●氏名 石口恒男（放射線医学講座・教授）

学会名称 第45回日本IVR学会総会

助成金額 300,000円

外国人研究員のご紹介

本学において研修するため、外国人研究員として来学された方をご紹介します。（敬称略）



ヤセル サベル ハラフ ザナド
Yasser Saber Khalaf Znad

国籍：イラク

現職：アルカーク総合病院脳神経外科専門医

受入講座：脳神経外科学講座

研究期間：H28. 4. 1～H28. 5. 31（2か月）

研究課題：脳神経外科全般の研修

（ヤセルさんからの一言）：I am Dr.YASSER SABER KHALAF ZNAD, neurosurgery specialist from Iraq.I am here in japan for neurosurgery training for two months, I was able to adapt to japan by its hospitality and kindness. Aichi Medical University Hospital has very high technological equipment not only for medical treatment and examination but also for education and research. I was lucky enough to meet professor and chairman Dr. MASAKAZU TAKAYASU and he kindly introduce me to AICHI MEDICAL UNEVERSIY training under his observation. This sophisticated hospital is beautifully organized, walking around the lake can totally open the mind enough experiencing the classical Japanese cherry blossoms beauty. Beside the enjoyable environment, professors and staff at AMU are extraordinary nice, they are always ready to offer their warmhearted assistance to make you feel at home. The professors are not only professors, but also can be your family whenever you need help in your everyday life. Training in AMU extremely exciting. I am deeply impressed to the organized medical system with their best effort to help the patients. I am sure that this precious experience is a great chance for every neurosurgeon who want to discover the art of neurosurgery. I am happy to have best teachers with nice environment. I hope to have tighter relationship with this great team in this wonderful university in the future. Words can not express my great respect and gratefulness toward professor and chairman Dr. MASAKAZU TAKAYASU, associate professor Dr. TAKEYA WATABE, all professors, doctors and medical staff for their great kindness.



ジャックリン ムバス ユーワイ
Jacqueline Mupas-Uy

国籍：フィリピン

現職：カヴィテ中央病院医員

受入講座：眼科学講座

研究期間：H28. 4. 13～H29. 3. 31（1年）

研究課題：眼窩内平滑筋線維の脱分化に関する研究

（ジャックリンさんからの一言）：I am Jacqueline Mupas-Uy, a foreign researcher from Philippines. It has been few days since I first step in Aichi Medical University Hospital but I can still vividly remember that day. Hospital structure, instruments and working areas are stunning. Even the doctors are amazing. It was a great learning experience and an eye opener of discipline and hard work. It is an honor to have an opportunity to work and learn with the orbit team who are dedicated to a well-balanced clinical and research practices in this respective field. Being exposed to extensive spectrum of eyelid, lacrimal and orbital management and surgeries encourages me to widen knowledge and be inspired to produce research. I look forward to contribute my research and publish in peer-reviewed journals.

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

大学学則の一部改正

愛知医科大学学則の一部が改正され、医学部入学定員増（113名から115名に増員）、大学附属施設の整備（先端医学研究センターの廃止及び研究創出支援センターの設置）及び評議会組織の見直し（評議会の廃止及び大学運営審議会の設置）が行われました。

施行日は平成28年4月1日

また、この改正に伴い、32件の関係規則が整備（新規制定3件、一部改正24件、廃止5件）されました。

施行日はいずれも平成28年4月1日

学長任用規程の一部改正

愛知医科大学学長任用規程の一部が改正され、学長の職務権限を明確にするため関係条文が整備されました。

施行日は平成28年4月1日

副学長規程の一部改正

愛知医科大学副学長規程の一部が改正され、学長と副学長の役割分担、副学長の数等に係る関係条文が整備されました。

施行日は平成28年4月1日

関連病院整備プロジェクトチーム要綱の制定

関連病院事業遂行についての詳細を審議していく体制を整備するため、学校法人愛知医科大学関連病院整備プロジェクトチーム要綱が制定され、プロジェクトチームの組織、審議事項等が定められました。

施行日は平成28年2月1日

研究活動上の不正行為の取扱いに関する規程の一部改正

愛知医科大学における研究活動上の不正行為の取扱いに関する規程の一部が改正され、文部科学省におけるガイドラインの趣旨に沿って本学における組織体制が整備されました。

施行日は平成28年3月7日

事業所内保育所に関する規程の一部改正

学校法人愛知医科大学事業所内保育所に関する規程の一部が改正され、夜間保育の開始に伴う保育時間及び保育料等が整備されました。

施行日は平成28年4月19日

研究員規程の一部改正

愛知医科大学研究員規程の一部が改正され、本学における研究員の身分、資格範囲等に係る規定が整備されました。

施行日は平成28年4月1日

医学研究科学生表彰規程の制定

愛知医科大学大学院医学研究科学生表彰規程が制定され、顕著な業績を挙げた医学研究科の学生に対する表彰基準、選考方法等が定められました。

施行日は平成28年4月1日

医学部履修規程の一部改正

愛知医科大学医学部履修規程の一部が改正され、医学部における授業科目、年次配当、単位数等が整理されました。

施行日は平成28年4月1日

医学教育センター規程の一部改正

愛知医科大学医学教育センター規程の一部が改正され、医学教育センターに2名以内の副センター長を置くことが出来ることとなりました。

施行日は平成28年4月1日

メディカルクリニック規程の一部改正

愛知医科大学医学部附属メディカルクリニック規程の一部が改正され、メディカルクリニックの診療科のうち、乳腺・内分泌外科が廃止されました。

施行日は平成28年4月1日

栄養サポートチーム規程の一部改正

愛知医科大学病院栄養サポートチーム規程の一部が改正され、栄養サポートチームの委員構成等が整理されました。

施行日は平成28年4月1日